This Work

I Dedicate to all True Theosophists,

In every Country,

And of every Race,

For they called it forth, and for them it was recorded.

この著作を、

すべての国の

そしてあらゆる人種の

すべての真の神智学徒に捧げる。

彼らが呼び求め、彼らのために記録されたからである。

前書き

この作品の出版が大幅に遅れたことを、著者（というより作者）はお詫びする必要があると思う。これは体調不良と事業の大きさによるものである。現在発行されている2冊の本でさえ、この計画は完全ではなく、またこの本で扱われている主題を完全に網羅しているわけでもない。アーリア人種の偉大なアデプトたちの生涯に含まれるオカルティズムの歴史を扱い、オカルト哲学が人生のあり方、あるべき姿に及ぼす影響を示す、大量の資料がすでに準備されているのである。本書が好評を博すならば、本書の構想は全面的に成し遂げられるであろう。第3巻は完全に準備ができており、第4巻もほとんどできている。

この構想は、この作品の準備が発表された当初は考えもしなかったことである。当初の発表では、『シークレット・ドクトリン』は『イシス・アンヴェイルド』を修正・拡大したものであることが意図されていた。しかしすぐに、『イシス』や他の秘教科学に関する著作ですでに世に出されている説明に加えられる説明は、別の処理方法を必要とするものであることが判明した。

著者は、これらのページに見られる多くの文体の欠陥や不完全な英語について、読者や批評家の寛容を求める必要はないと考えている。彼女は外国人であり、英語の知識は人生の後半に習得したものである。英語は、彼女の義務として世に問うべき真理を伝えるのに、最も広く普及する媒体を提供するために用いられた。

これらの真理は、決して啓示として提示されたものではなく、また著者は、世界の歴史上初めて公開された神秘的な伝承の暴露者としての立場を主張するものでもない。この本に書かれていることは、アジアやヨーロッパ初期の偉大な宗教の経典が書かれた何千冊もの本の中に散在しているもので、文字や記号の下に隠され、そのベールのためにこれまで気づかれずにいたものだからである。今試みられているのは、最も古い教義を集め、それらを一つの調和した、壊れない全体とすることである。筆者が前任者に比べて唯一有利な点は、個人的な憶測や理論に頼る必要がないことである。この著作は、彼女自身がより進んだ学徒たちから教わったことを部分的に述べたものであり、いくつかの詳細については、彼女の研究結果によって補足されたものだからである。

この著作は、彼女自身の研究と観察の結果を補足したものである。ここに述べた事実の多くを公表する必要が生じたのは、ここ数年、多くの神智学徒や神秘主義の学習者が、以前に伝えられたわずかな事実から完全な思想体系を作り上げようと想像を膨らませ、乱暴で空想的な思索にふけったからである。

本書は「秘密の教義」の全体ではなく、その基本的な教義の断片を厳選したものであり、特に、さまざまな著者が取り上げ、真理とは似ても似つかないように歪曲したいくつかの事実に注意を払ったことは、説明するまでもないだろう。

しかし、これらの巻に含まれる教えは、たとえ断片的で不完全であっても、ヒンズー教、ゾロアスター教、カルデア教、エジプト教に属するものではなく、仏教、イスラム教、ユダヤ教、キリスト教にのみ属するものではないことを明確に述べることが望ましいと思われる。「秘密の教義」は、これらすべての本質である。その起源において、そこから生まれた様々な宗教的計画は今、元の要素に融合し、そこからあらゆる神秘と教義が成長し、発展し、実体化するようにできている。

この本は、多くの大衆が最も荒唐無稽な種類のロマンスと見なす可能性が高い。

したがって、著者はこの著作に含まれるすべての責任を負い、そのすべてを考案したという非難に直面することさえ、十分に覚悟しているのである。多くの欠点があることは十分承知している。しかし、多くの人が非現実に思うかもしれないが、その論理的一貫性と矛盾がないことによって、この新しい創世記は、少なくとも現代科学が自由に受け入れている「作業仮説」と同じレベルに位置づけられると主張しているのである。さらに、この創世記は教義的権威に訴えるのではなく、自然に忠実であり、均一性と類似性の法則に従っているため、考察の対象となるのである。

この著作の目的は、次のように述べることができる：自然が「原子の偶然の一致」ではないことを示し、宇宙の計画の中で人間に正当な位置を与えること、すべての宗教の基礎である古代の真理を劣化から救い出し、ある程度まで、それらがすべて生じる基本的統一を明らかにすること、最後に、自然の神秘的側面が近代文明の科学によって決してアプローチされてこなかったことを示すことである。

これがある程度達成されれば、著者は満足である。この本は人類のために書かれたものであり、人類と将来の世代によって判断されなければならない。著者はどの下級裁判所の控訴をも認めない。罵倒には慣れている。中傷には日々慣れ親しみ、誹謗には静かな侮蔑の笑みを浮かべる。

De minimis non curat lex.（法は小さなことを気にしない）。

1888年10月、ロンドン。

HPB

INTRODUCTORY.

“ Gently to hear, kindly to judge.”

— Shakespeare.

序文

「優しく聞いて、親切に判断する」（シェイクスピア）

　Since the appearance of Theosophical literature in England, it has become customary to call its teachings “Esoteric Buddhism.” And, having become a habit—as an old proverb based on daily experience has it—“ Error runs down an inclined plane, while Truth has to laboriously climb its way up hill.”

イギリスで神智学の文献が出現して以来、その教えを「エソテリック・ブッディズム」と呼ぶのが慣例となった。そして、日々の経験に基づく古いことわざのように、「誤りは坂道を駆け下りるが、真理は苦労して坂を登らなければならない」というのが習慣になってしまったのである。

　Old truisms are often the wisest. The human mind can hardly remain entirely free from bias, and decisive opinions are often formed before a thorough examination of a subject from all its aspects has been made. This is said with reference to the prevailing double mistake (a) of limiting Theosophy to Buddhism : and (b) of confounding the tenets of the religious philosophy preached by Gautama, the Buddha, with the doctrines broadly outlined in “ Esoteric Buddhism.” Any thing more erroneous than this could be hardly imagined. It has enabled our enemies to find an effective weapon against theosophy; because, as an eminent Pali scholar very pointedly expressed it, there was in the volume named “ neither esotericism nor Buddhism.” Th esoteric truths, presented in Mr. Sinnett’s work, had ceased to be esoteric from the moment they were made public ; nor did it contain the religion of Buddha, but simply a few tenets from a hitherto hidden teaching which are now supplemented by many more, enlarged and explained in the present volumes. But even the latter, though giving out many fundamental tenets from the Secret Doctrine of the East, raise but a small corner of the dark veil. For no one, not even the greatest living adept, would be permitted to, or could—even if he would—give out promiscuously, to a mocking, unbelieving world, that which has been so effectually concealed from it for long æons and ages.

　古い通説は往々にして最も賢明なものである。人間の心は、偏見から完全に自由であり続けることは難しく、ある主題をあらゆる側面から徹底的に検討する前に、決定的な意見が形成されることがよくある。これは、神智学を仏教に限定して考えることと、ゴータマ（釈迦）が説いた宗教哲学の教義と『エソテリック・ブッディズム』の教義を混同して考えるという、二重の間違いが蔓延していることに関連して言っているのである。これほど誤ったことはないだろう。というのも、ある著名なパーリ語の学者が極めて率直に表現したように、この本にあるのは「秘教でも仏教でもない」のである。シネット氏の著作で示された秘教的真理は、公開された瞬間から秘教的ではなくなり、またブッダの宗教も含まれていなかった。しかし、後者でさえ、東洋の秘密の教義から多くの基本的な教義を与えてはいるが、暗いベールのほんの一角を持ち上げているに過ぎないのである。なぜなら誰一人として、たとえ最も偉大な現存する熟練者（アデプト）であっても、長い年月にわたってうまく隠されてきたものを、嘲笑する不信心な世界に対してむやみに提供することは許されないし、たとえそうしたとしてもできないからである。

　 “ Esoteric Buddhism ” was an excellent work with a very unfortunate title, though it meant no more than does the title of this work, the “Secret Doctrine.” It proved unfortunate, because people are always in the habit of judging things by their appearance, rather than their meaning ; and because the error has now become so universal, that even most of the Fellows of the Theosophical Society have fallen victims to the same misconception. From the first, however, protests were raised by Brahmins and others against the title ; and, in justice to myself, I must add that “ Esoteric Buddhism ” was presented to me as a completed volume, and that I was entirely unaware of the manner in which the author intended to spell the word “ Budh-ism.”

『エソテリック・ブッディズム』は、この著作のタイトルである『シークレット・ドクトリン』（秘教）と同じような意味を持つにもかかわらず、非常に不幸なタイトルを持つ優れた著作であった。というのも、人々は常に物事をその意味よりも外見で判断する習慣があり、この間違いは今や普遍的なものとなっていて、神智学協会の会員の多くでさえ、同じ誤解の犠牲になっているからである。しかし、当初からバラモンやその他の人々からこの書名に対して抗議が寄せられていた。私自身の名誉のために付け加えると、『エソテリック・ブッディズム』は完成した書物として私に贈られており、著者が「ブッディズム」（Budh-ism）という言葉をどのように綴ろうとしているのか、私は全く知らなかったのである。

　This has to be laid directly at the door of those who, having been the first to bring the subject under public notice, neglected to point out the difference between “Buddhism”—the religious system of ethics preached by the Lord Gautama, and named after his title of Buddha, “ the Enlightened ”—and Budha, “ Wisdom,” or knowledge (Vidya), the faculty of cognizing, from the Sanskrit root “ Budh,” to know. We theosophists of India are ourselves the real culprits, although, at the time, we did our best to correct the mistake. (See Theosophist, June, 1883.) To avoid this deplorable misnomer was easy ; the spelling of the word had only to be altered, and by common consent both pronounced and written “ Budhism,” instead of “ Buddhism.” Nor is the latter term correctly spelt and pronounced, as it ought to be called, in English, Buddhaïsm, and its votaries “ Buddhaïsts.”

このことは、このテーマを最初に世間に知らせたにもかかわらず、ゴータマ王によって説かれた倫理学の宗教体系である「仏教」（Buddhism）と、「悟りを開いた者」という彼の称号から名付けられた「ブッダ」（Buddha）と、「智慧」または知識（Vidya）つまりサンスクリット語の「知る」という語の語根から来た認識の能力“Budha“との違いを指摘することを怠った人々の責任でなければならないのだ。当時、私たちはこの誤りを正すために最善を尽くした（Theosophist 1883年6月を参照）が、私たちインドの神智学徒が真の犯人なのである。この嘆かわしい誤称を避けるのは簡単で、単語の綴りを変えるだけで良かったのであり、共通の同意のもとに“Buddhism“（ブッディズム）ではなく“Budhism“（ブディズム）と発音・表記すればよかったのだ。また、後者の用語は、英語では“Buddhaism“、その信奉者は“Buddhaists“と呼ばれるべきで、正しく綴られ発音されていないのである。

　This explanation is absolutely necessary at the beginning of a work like this one. The “ Wisdom Religion ” is the inheritance of all the nations, the world over, though the statement was made in “ Esoteric Buddhism ” (Preface to the original Edition) that “ two years ago (i.e. 1883), neither I nor any other European living, knew the alphabet of the Science, here for the first time put into a scientific shape,” etc. This error must have crept in through inadvertence. For the present writer knew all that which is “ divulged ” in “ Esoteric Buddhism ”— and much more—many years before it became her duty (in 1880) to impart a small portion of the Secret Doctrine to two European gentlemen, one of whom was the author of “Esoteric Buddhism”; and surely the present writer has the undoubted, though to her, rather equivocal, privilege of being a European, by birth and education. Moreover, a considerable part of the philosophy expounded by Mr. Sinnett was taught in America, even before Isis Unveiled was published, to two Europeans and to my colleague, Colonel H. S. Olcott. Of the three teachers the latter gentleman has had, the first was a Hungarian Initiate, the second an Egyptian, the third a Hindu. As permitted, Colonel Olcott has given out some of this teaching in various ways ; if the other two have not, it has been simply because they were not allowed: their time for public work having not yet come. But for others it has, and the appearance of Mr. Sinnett’s several interesting books is a visible proof of the fact. It is above everything important to keep in mind that no theosophical book acquires the least additional value from pretended authority.

このような説明は、本書のような著作の冒頭で絶対に必要である。「智慧の宗教」は世界各国の遺産であるが、『エソテリック・ブッディズム』（原書版序文）には、「2年前（すなわち1883年）、私も他のいかなるヨーロッパ人も、ここで初めて科学的な形にされた科学の初歩を知らなかった」などと書かれていた。この誤りは、うっかりしていたためだろう。というのも、現在の著者は『エソテリック・ブッディズム』に「漏ら」されていることをすべて知っており、それ以上のことも知っていたからである。1880年に、『エソテリック・ブッディズム』の著者である二人のヨーロッパ人男性に『シークレット・ドクトリン』のごく一部を教えることが彼女の義務になる何年も前に、確かに現在の著者は、生まれと教育によって、彼女にとってはかなり妥当性を欠いているものの、ヨーロッパ人であることの疑いない特権を有しているのである。さらに、シネット氏によって説かれた哲学のかなりの部分は、『イシス・アンヴェイルド』が出版される以前から、アメリカで二人のヨーロッパ人と私の同僚であるH・S・オルコット大佐に教えられていたのである。後者の３人の教師のうち、１人はハンガリー人のイニシエート、２人目はエジプト人、３人目はインド人であった。許可されたため、オルコット大佐はこの教えのいくつかをさまざまな方法で提供してきた。他の２人がそうしなかったとすれば、それは単に許されなかったからであり、公的な仕事をする時期がまだ来ていなかったからである。シネット氏の興味深い著書がいくつか出版されているのも、その証拠である。神智学の書物は、権威を振りかざすことによって、いささかも付加価値を生まないということを心に留めておくことは、何にもまして重要なことである。

　In etymology Adi, and Adhi Budha, the one (or the First) and “ Supreme Wisdom ” is a term used by Aryâsanga in his Secret treatises, and now by all the mystic Northern Buddhists. It is a Sanskrit term, and an appellation given by the earliest Aryans to the Unknown deity; the word “Brahmâ” not being found in the Vedas and the early works. It means the absolute Wisdom, and “ Adi-bhûta ” is translated “ the primeval uncreated cause of all ” by Fitzedward Hall. Æons of untold duration must have elapsed, before the epithet of Buddha was so humanized, so to speak, as to allow of the term being applied to mortals and finally appropriated to one whose unparalleled virtues and knowledge caused him to receive the title of the “ Buddha of Wisdom unmoved.” Bodha means the innate possession of divine intellect or “understanding”; “Buddha,” the acquirement of it by personal efforts and merit ; while Buddhi is the faculty of cognizing the channel through which divine knowledge reaches the “ Ego,” the discernment of good and evil, “ divine conscience ” also ; and “ Spiritual Soul,” which is the vehicle of Atma. “ When Buddhi absorbs our Ego- tism (destroys it) with all its Vikaras, Avalôkitêshvara becomes manifested to us, and Nirvana, or Mukti, is reached,” “ Mukti ” being the same as Nirvana, i.e., freedom from the trammels of “Maya” or illusion. “ Bodhi ” is likewise the name of a particular state of trance condition, called Samadhi, during which the subject reaches the culmination of spiritual knowledge.

語源のアーディ（Adi）とアーディ・ブッダ（Adhi Budha）つまり一者（または最初のもの）で、「最高の智慧」という言葉は、アーリアサンガがその秘伝書の中で使っており、現在は秘教的な北伝仏教徒が皆使っている言葉である。サンスクリット語であり、初期のアーリア人が未知の神に対してつけた呼び名である「ブラフマー」という言葉はヴェーダや初期の著作には見当たらない。それは絶対的な智慧を意味し、「アーディ・ブータ」はフィッツエドワード・ホールによって「すべての原始的で創造されない原因」と訳されている。仏陀という言葉が人間に適用され、最終的にその比類なき徳と知識によって「不動の智慧の仏陀」という称号を得た者に適用されるようになるまでには、数え切れないほどの時間が経過したに違いない。「ボーダ」（Bodha）は神聖な知性または「理解」の生得的な所有を意味し、「仏陀」（Buddha）は個人の努力と功績によってそれを獲得することである。一方「ブッディ」（Buddhi）は、神聖な知識が「自我」に到達する経路を認識する能力、善と悪の識別、「神聖な良心」、そして「霊的魂」で、「アートマ」の媒体となっているものである。「ブッディが私たちの自我をそのすべてのヴィカーラ（訳注：形や心の変化）とともに奪う（破壊する）とき、観音菩薩が私たちに現れ、涅槃（ムクティ）に達する」。「ムクティ」は涅槃と同じ、すなわち「マーヤー」または幻影のとらわれからの自由である。「菩提」（Bodhi）は、「三昧」と呼ばれる特定の恍惚状態の名前でもあり、その間に霊的知識の絶頂に達する。

　Unwise are those who, in their blind and, in our age, untimely hatred of Buddhism, and, by re-action, of “ Budhism,” deny its esoteric teach- ings (which are those also of the Brahmins), simply because the name suggests what to them, as Monotheists, are noxious doctrines. Unwise is the correct term to use in their case. For the Esoteric philosophy is alone calculated to withstand, in this age of crass and illogical materialism, the repeated attacks on all and everything man holds most dear and sacred, in his inner spiritual life. The true philosopher, the student of the Esoteric Wisdom, entirely loses sight of personalities, dogmatic beliefs and special religions. Moreover, Esoteric philosophy reconciles all religions, strips every one of its outward, human garments, and shows the root of each to be identical with that of every other great religion. It proves the necessity of an absolute Divine Principle in nature. It denies Deity no more than it does the Sun. Esoteric philosophy has never rejected God in Nature, nor Deity as the absolute and abstract Ens. It only refuses to accept any of the gods of the so-called monotheistic religions, gods created by man in his own image and likeness, a blas- phemous and sorry caricature of the Ever Unknowable. Furthermore, the records we mean to place before the reader embrace the esoteric tenets of the whole world since the beginning of our humanity, and Buddhistic occultism occupies therein only its legitimate place, and no more. Indeed, the secret portions of the “Dan ” or “ Jan-na ”\* (“Dhyan ”) of Gautama’s metaphysics—grand as they appear to one unacquainted with the tenets of the Wisdom Religion of antiquity—are but a very small portion of the whole. The Hindu Reformer limited his public teachings to the purely moral and physiological aspect of the Wisdom- Religion, to Ethics and man alone. Things “ unseen and incorporeal,” the mystery of Being outside our terrestrial sphere, the great Teacher left entirely untouched in his public lectures, reserving the hidden Truths for a select circle of his Arhats. The latter received their Initiation at the famous Saptaparna cave (the Sattapanni of Mahavansa) near Mount Baibhâr (the Webhâra of the Pali MSS.). This cave was in Rajagriha, the ancient capital of Mogadha, and was the Cheta cave of Fa-hian, as rightly suspected by some archæologists.†

　\* Dan, now become in modern Chinese and Tibetan phonetics ch’an, is the general term for the esoteric schools, and their literature. In the old books, the word Janna is defined as “ to reform one’s self by meditation and knowledge,” a second inner birth. Hence Dzan, Djan phonetically, the “ Book of Dzyan.”

† Mr. Beglor, the chief engineer at Buddhagaya, and a distinguished archæologist, was the first, we believe, to discover it.

　仏教を盲目的に、そして現代では時期尚早に憎悪し、その反動で『ブディズム』を否定する人々は、その名前が一神教徒としての彼らにとって有害な教義を示唆するからといって、その秘教（それはバラモンのものでもある）を否定しているのである。彼らの場合、賢くないというのが正しい表現である。なぜなら、秘教哲学は、この粗野で非論理的な唯物論の時代において、人間がその内なる精神生活の中で最も大切で神聖なものとするすべてのものに対する度重なる攻撃に耐えるために、唯一用意されたものだからである。真の哲学者、秘められた智慧の学徒は、人格、独断的な信念、特別な宗教を完全に失う。さらに、秘教哲学はすべての宗教を和解させ、すべての宗教の外側の人間的な衣をはぎ取り、それぞれの根本が他のすべての偉大な宗教の根本と同一であることを示す。秘教哲学は、自然における絶対的「神の原理」の必要性を証明するものである。秘教哲学は太陽を否定しないのと同じように神を否定しない。秘教哲学は、自然における神も、絶対的で抽象的な実在（ens）としての神も、決して否定していない。ただ、いわゆる一神教の神々、つまり人間が自分のイメージと姿に似せて作った神々、「永遠の不可知」（Ever Unknowable）の赤裸々で残念な歪曲画を一切認めないということである。さらに、我々が読者の前に置こうとしている記録は、人類の始まり以来、全世界の秘教的な信条を包含しており、仏教的オカルティズムはそこに正当な地位を占めるだけで、それ以上ではない。実際、ゴータマの形而上学の「ダン」または「ジャンナ」\*（「ディヤーン」）の秘密部分は、古代の智慧の宗教の教義を知らない者には壮大に見えるが、全体のごく一部に過ぎないのである。このヒンドゥー教の改革者は、公の場での教えを、智慧の宗教の純粋に道徳的、生理学的な側面、つまり倫理と人間だけに限定した。見えないもの、実体のないもの」、つまり私たちの地球上の領域の外にある存在の謎について、偉大な教師は公開講座でまったく触れず、隠された真理を選ばれた羅漢（アルハン）のグループのためにとっておいたのである。後者はバイバール山（パーリ語の写本でウェバーラ）近くの有名なサプタパルナ洞窟（MahavansaのSattapanni）でイニシエーションを受けた。この洞窟はモガダの古都ラジャグリハにあり、一部の考古学者によって正しく疑われているように、ファヒアンのチェタ洞窟であった†。

\*ダンは、現代の中国語とチベット語の音声学でch'anとなり、秘教の学派とその学識の一般的な用語である。古い書物では、「ジャンナ」という言葉は「瞑想と知識によって自己を改革すること」、つまり第二の内的誕生と定義されている。したがって、Dzan、Djanの音韻は、"Dzyanの書"である。

†ブッダガヤでチーフ・エンジニアであり、著名な考古学者であるベグラー氏が、最初に発見したものと思われる。

　Time and human imagination made short work of the purity and philo sophy of these teachings, once that they were transplanted from the secret and sacred circle of the Arhats, during the course of their work of proselytism, into a soil less prepared for metaphysical conceptions than India; i.e., once they were transferred into China, Japan, Siam, and Burmah. How the pristine purity of these grand revelations was dealt with may be seen in studying some of the so-called “ esoteric ” Buddhist schools of antiquity in their modern garb, not only in China and other Buddhist countries in general, but even in not a few schools in Thibet, left to the care of uninitiated Lamas and Mongolian innovators.

これらの教えは、アルハットの秘密で神聖なグループから、布教の過程で、インドほど形而上学的概念に準備されていない土壌つまり、中国、日本、シャム（タイ）、ビルマに移植されると、時間と人間の想像力は、その純粋さと哲学を短絡的に処理した。これらの壮大な啓示の原初的な純粋さがどのように扱われたかは、中国や他の仏教国全般だけでなく、チベットの少なからぬ学派でさえも、不勉強なラマ僧やモンゴルの革新者の手に委ねられ、古代のいわゆる「秘教」学派を現代の装いで研究すれば、わかるだろう。

　Thus the reader is asked to bear in mind the very important difference between orthodox Buddhism—i.e., the public teachings of Gautama the Buddha, and his esoteric Budhism. His Secret Doctrine, however, differed in no wise from that of the initiated Brahmins of his day. The Buddha was a child of the Aryan soil, a born Hindu, a Kshatrya and a disciple of the “ twice born ” (the initiated Brahmins) or Dwijas. His teachings, therefore, could not be different from their doctrines, for the whole Buddhist reform merely consisted in giving out a portion of that which had been kept secret from every man outside of the “ enchanted ” circle of Temple-Initiates and ascetics. Unable to teach all that had been imparted to him—owing to his pledges—though he taught a philosophy built upon the ground-work of the true esoteric knowledge, the Buddha gave to the world only its outward material body and kept its soul for his Elect. (See also Volume II.) Many Chinese scholars among Orientalists have heard of the “ Soul Doctrine.” None seem to have understood its real meaning and importance.

このように、読者は正統派仏教（orthodox Buddhism）すなわちゴータマ・ブッダの公的な教えと、彼の秘教であるブッディズム（esoteric Budhism）との間の非常に重要な違いを心に留めておくよう求められているのである（訳者注：「ブッディズム」は「ブッディズム」の意）。しかし、彼の秘密の教義は、当時の入門した（イニシエーションを受けた）バラモンの教義と何ら変わるところはない。ブッダはアーリア人の土壌の子であり、生まれながらのヒンズー教徒、クシャトリアであり、「二度生まれ」（イニシエーションを受けたバラモン）またはドウィジャの弟子であった。したがって、彼の教えがこうした人々の教義と異なるはずはない。仏教の改革全体は、この寺院の入門者（イニシエート）と修行者の「魅惑的な」輪の外にいるすべての人に秘密にされていたものの一部を提供することにすぎなかったからである。ブッダは、真の秘教的知識の基礎の上に構築された哲学を教えながらも、誓約のために、自分に授けられたものをすべて教えることができず、外側の物質的ボディだけを世界に与え、その魂を自分の選民のためにとっておいたのである(2巻も参照）。東洋学者に属する多くの中国人学者は、この「魂の教義」を耳にしたことがある。その本当の意味と重要性を理解している者はいないようだ。

　That doctrine was preserved secretly—too secretly, perhaps—within the sanctuary. The mystery that shrouded its chief dogma and aspira- tions—Nirvana—has so tried and irritated the curiosity of those scholars who have studied it, that, unable to solve it logically and satisfactorily by untying the Gordian knot, they cut it through, by declaring that Nirvana meant “absolute annihilation“.

　その教義は、おそらく聖域の中で内密に、あまりにも内密に保存されていた。その主な教義と希求である「涅槃」（ニルヴァーナ）を包む謎は、それを研究した学者たちの好奇心を大いに刺激し、ゴルディアスの結び目を解くことによって論理的かつ満足に解決することができず、涅槃とは「絶対的消滅」を意味すると宣言してそれを切り裂いてしまったのである

　Toward the end of the first quarter of this century, a distinct class of literature appeared in the world, which became with every year more defined in its tendency. Being based, soi-disant, on the scholarly researches of Sanskritists and Orientalists in general, it was held scientific. Hindu, Egyptian, and other ancient religions, myths, and emblems were made to yield anything the symbologist wanted them to yield, thus often giving out the rude outward form in place of the inner meaning. Works, most remarkable for their ingenious deductions and speculations, in circulo vicioso, foregone conclusions generally changing places with premisses as in the syllogisms of more than one Sanskrit and Pali scholar, appeared rapidly in succession, over-flooding the libraries with dissertations rather on phallic and sexual worship than on real symbology, and each contradicting the other.

　この世紀の最初の四半世紀が終わるころ、世界にはある独特の文学が現れ、その傾向は年を追うごとに明確になっていった。この文学は、サンスクリット学者や東洋学者による学術的な研究を基礎としており、科学的であるとされた。ヒンズー教、エジプト、その他の古代の宗教、神話、象徴が、象徴学者が望むものであれば何でも得られるようにされた。

そのため、内的な意味の代わりに粗雑な外的形態を与えることがしばしばあった。サンスクリット語やパーリ語の学者による数多くの三段論法に見られるように、その独創的な推論や推測が最も顕著な著作が次々と現れ、真のシンボロジーよりもむしろ男根崇拝や性的崇拝に関する論文で図書館が溢れ、それぞれが互いに矛盾しているのである。

　Toward the end of the first quarter of this century, a distinct class of literature appeared in the world, which became with every year more defined in its tendency. Being based, soi-disant, on the scholarly researches of Sanskritists and Orientalists in general, it was held scientific. Hindu, Egyptian, and other ancient religions, myths, and emblems were made to yield anything the symbologist wanted them to yield, thus often giving out the rude outward form in place of the inner meaning. Works, most remarkable for their ingenious deductions and speculations, in circulo vicioso, foregone conclusions generally changing places with premisses as in the syllogisms of more than one Sanskrit and Pali scholar, appeared rapidly in succession, over-flooding the libraries with dissertations rather on phallic and sexual worship than on real symbology, and each contradicting the other.

　これが、おそらく、もっとも深い沈黙と秘密が何千年も続いた後、アルカイック時代の「秘密の教義」からいくつかの基本的な真理の輪郭が、今、光を見ることを許されている真の理由である。私が「いくつかの真理」と言ったのは、忠告を込めてである。なぜなら、語られざるべきことは、このような100冊の本には収まらないし、現在のサドカイ派の世代に伝授することはできないからである。しかし、今与えられているわずかなものでさえ、これらの重要な真理について完全に沈黙しているよりはましである。今日の世界は、未知に向かってその狂った歩みを続けており、物理学者の把握が及ばない問題があるたびに、未知と混同する用意がありすぎる。それは今や広大な闘技場、すなわち不和と永遠の争いの真の谷間、ネクロポリス（死者の街）となっており、そこには我々の霊的魂の最高で最も神聖な願望が埋もれているのである。その魂は、新しい世代になるたびに、より麻痺し、萎縮していくのである。グリーリー（訳注：1811-72 米国のジャーナリスト・政治家；New York Tribune を発刊，奴隷制反対を主張し ‘Go west, young man’という標語を流布させた）

によって語られた社会の「愛すべき異教徒と熟達した放蕩者」は、過去の死んだ科学の復活をほとんど気にしない。しかし、今与えられるかもしれないわずかな真実を学ぶ資格を持つ、真剣な学徒のかなりの少数派がいる。そしてそれらの学徒は今、『イシス・アンベールド』あるいは後の、秘教科学の謎を説明しようとした試みが出版された10年前よりもずっと多くなっている。

　One of the greatest, and, withal, the most serious objection to the correctness and reliability of the whole work will be the preliminary Stanzas: “How can the statements contained in them be verified?” True, if a great portion of the Sanskrit, Chinese, and Mongolian works quoted in the present volumes are known to some Orientalists, the chief work—that one from which the Stanzas are given—is not in the possession of European Libraries. The Book of Dzyan (or “ Dzan ”) is utterly unknown to our Philologists, or at any rate was never heard of by them under its present name. This is, of course, a great drawback to those who follow the methods of research prescribed by official Science ; but to the students of Occultism, and to every genuine Occultist, this will be of little moment. The main body of the Doctrines given is found scattered throughout hundreds and thousands of Sanskrit MSS., some already translated—disfigured in their interpretations, as usual,— others still awaiting their turn. Every scholar, therefore, has an opportunity of verifying the statements herein made, and of checking most of the quotations. A few new facts (new to the profane Orientalist, only) and passages quoted from the Commentaries will be found difficult to trace. Several of the teachings, also, have hitherto been transmitted orally: yet even those are in every instance hinted at in the almost count- less volumes of Brahminical, Chinese and Tibetan temple-literature.

著作全体の正しさと信頼性に対して、最も大きく、そして最も深刻な反論の一つは、緒言のスタンザであろう。「そこに書かれていることは、どうやって検証できるのか」ということである。確かに、本書で引用されているサンスクリット語、中国語、モンゴル語の著作の大部分は一部の東洋学者に知られているとしても、スタンザが引用されている主要な著作はヨーロッパの図書館が所蔵しているものではない。『ディヤーン』（“Dzyan“または“Dzan“）の書は、言語学者にはまったく知られておらず、少なくとも現在の名前で知られることはなかった。もちろん、これは公認の科学が規定する研究方法に従う人々にとっては大きな欠点であるが、オカルティズムの学徒やあらゆる本物のオカルティストにとっては、これはほとんど重要なことではないだろう。この教義の主要部分は、何百、何千ものサンスクリット語版本に散らばっており、あるものはすでに翻訳されているが、いつものように解釈は混乱しており、またあるものはまだその出番を待っているところである。したがって、すべての学者が、ここで述べられたことを検証し、ほとんどの引用を確認する機会がある。いくつかの新しい事実（俗っぽい東洋学者にとっては新しいだけ）や、「注釈」から引用された箇所は、追跡が困難であることがわかるだろう。また、いくつかの教えはこれまで口頭で伝えられてきたが、バラモン教、中国、チベットの寺院の文献はほとんど数えるほどしかなく、それらもあらゆる場面で示唆を与えている。

　However it may be, and whatsoever is in store for the writer through malevolent criticism, one fact is quite certain. The members of several esoteric schools—the seat of which is beyond the Himalayas, and whose ramifications may be found in China, Japan, India, Tibet, and even in Syria, besides South America—claim to have in their possession the sum total of sacred and philosophical works in MSS. and type: all the works, in fact, that have ever been written, in whatever language or characters, since the art of writing began; from the ideographic hieroglyphs down to the alphabet of Cadmus and the Devanagari.

それがどうであれ、また悪意ある批評によってこの著者がどんな目に遭おうとも、一つの事実は確かである。ヒマラヤ山脈を越えて、中国、日本、インド、チベット、さらにはシリア、南米にまでその勢力を広げているいくつかの秘教的な学派のメンバーは、聖典や哲学的な著作物の総体を、表意文字のヒエログリフから、カドモスのアルファベットや、デーヴァナーガリーに至るまで、写本や象徴で所有していると主張しているのだ。

　It has been claimed in all ages that ever since the destruction of the Alexandrian Library (see Isis Unveiled, Vol. II., p.27), every work of a character that might have led the profane to the ultimate discovery and comprehension of some of the mysteries of the Secret Science, was, owing to the combined efforts of the members of the Brotherhoods, diligently searched for. It is added, moreover, by those who know, that once found, save three copies left and stored safely away, such works were all destroyed. In India, the last of the precious manuscripts were secured and hidden during the reign of the Emperor Akbar.\*

\*Prof. Max Müller shows that no bribes or threats of Akbar could extort from the Brahmans the original text of the Veda ; and boasts that European Orientalists have it (Lecture on the “ Science of Religion,” p. 23). Whether Europe has the complete text is very doubtful, and the future may have very disagreeable surprises in store for the Orientalists.

　アレクサンドリア図書館が破壊されて以来（Isis Unveiled, Vol. II., p.27参照）、「秘密の科学」の謎のいくつかを究極的に発見し理解するよう俗人を導くかもしれない性質のあらゆる著作が、同胞団のメンバーの総力を挙げて熱心に探されたことは、あらゆる時代において主張されてきた。さらに、知る人ぞ知ることだが、いったん見つかったら、コピーを３部残して安全に保管された以外は、そのような著作物はすべて破棄された。インドでは、最後の貴重な写本はアクバル帝の時代に確保され、隠されたのである\*。

\*マックス・ミュラー教授は、アクバルは賄賂や脅しによってバラモンからヴェーダの原典を引き出すことができなかったことを示し、ヨーロッパの東洋学者がそれを持っていると自慢している（Lecture on the “ Science of Religion,” p. 23)。ヨーロッパが完全なテキストを持っているかどうかは非常に疑問であり、将来は東洋学者に非常に不愉快な驚きが待ち受けているかもしれない。

　It is maintained, furthermore, that every sacred book of that kind, whose text was not sufficiently veiled in symbolism, or which had any direct references to the ancient mysteries, after having been carefully copied in cryptographic characters, such as to defy the art of the best and cleverest palæographer, was also destroyed to the last copy. During Akbar’s reign, some fanatical courtiers, displeased at the Emperor’s sinful prying into the religions of the infidels, themselves helped the Brahmans to conceal their MSS. Such was Badáonì, who had an undisguised horror for Akbar’s mania for idolatrous religions.\*

　\* Badáoní wrote in his Muntakhab at Tawarikh: “ His Majesty relished inquiries into the sects of these infidels (who cannot be counted, so numerous they are, and who have no end of revealed books) . . . As they (the Sramana and Brahmins) surpass other learned men in their treatises on morals, on physical and religious sciences, and reach a high degree in their knowledge of the future, in spiritual power, and human perfection, they brought proofs based on reason and testimony, and inculcated their doctrines so firmly that no man could now raise a doubt in his Majesty even if mountains were to crumble to dust, or the heavens were to tear asunder.” This work “ was kept secret, and was not published till the reign of Jahângir.” (Ain i Akbari, translated by Dr. Blochmann, p. 104, note.)

さらに、その種の聖典のうち、本文が十分に象徴的なベールに包まれていないもの、あるいは古代の神秘に直接言及しているものは、最も賢い古文書学者の技術をものともしないような暗号文字で慎重に複写された後、最後の１枚まで処分されたとされている。アクバルの時代、異教徒の宗教を詮索する皇帝の罪深さに不満を抱いた狂信的な廷臣たちが、自らバラモンたちの手書き写本の隠蔽に手を貸した。アクバルの偶像崇拝的宗教に対する熱狂に、恐れおののいたバドーニがそれである\*。

\*バダオニ（訳注：アブドゥル・カディール・バダユニ〈1540-1605〉…インドで最初の大ムフティー。歴史家であり翻訳者でもあり、ムガル帝国に住んでいた。ヒンズー教の作品、ラーマーヤナとマハーバーラタを翻訳した）は、”The Muntakhab Al-Tawarikh”にこう書いている。「陛下は、これらの異教徒（数え切れないほど多く、啓示された書物に事欠かない）の宗派への探求を喜ばれた。彼ら（シュラマナ〈沙門〉とバラモン）は、道徳、物理学、宗教学に関する論文で他の学者に勝り、未来に関する知識、精神力、人間の完成度において高いレベルに達しているので、理性と証言に基づく証拠をもたらし、彼らの教義をしっかりと教え込んだ。この著作は［秘密にされ、ジャハーンギールの治世まで出版されなかった］」 （Ain i Akbari, translated by Dr. Blochmann, p. 104, note.）。

　Moreover in all the large and wealthy lamasaries, there are subterranean crypts and cave-libraries, cut in the rock, whenever the gonpa and the lhakhang are situated in the mountains. Beyond the Western Tsay- dam, in the solitary passes of Kuen-lun† there are several such hiding- places. Along the ridge of Altyn-Toga, whose soil no European foot has ever trodden so far, there exists a certain hamlet, lost in a deep gorge. It is a small cluster of houses, a hamlet rather than a monastery, with a poor-looking temple in it, with one old lama, a hermit, living near by to watch it. Pilgrims say that the subterranean galleries and halls under it contain a collection of books, the number of which, according to the accounts given, is too large to find room even in the British Museum.‡

† Karakorum mountains, Western Tibet.

‡ According to the same tradition the now desolate regions of the waterless land of Tarim—a true wilderness in the heart of Turkestan—were in the days of old covered with flourishing and wealthy cities. At present, hardly a few verdant oases relieve its dead solitude. One such, sprung on the sepulchre of a vast city swallowed by and buried under the sandy soil of the desert, belongs to no one, but is often visited by Mongolians and Buddhists. The same tradition speaks of immense subterranean abodes, of large corridors filled with tiles and cylinders. It may be an idle rumour, and it may be an actual fact.

　さらに、すべての大規模で裕福なラマ僧院では、ゴンパ（訳注：荒々しい岩山の上に建てられたラダックを代表する僧院のひとつ）とラカン（訳注：ブータン中部、ブムタン地方のチョコルの谷にある僧院）が山中にある場合には、決まって地下にある地下室と岩に掘った穴蔵が存在するのである。西のツァイダム盆地を越えた、崑崙山脈†の孤独な峠には、そのような隠し場所がいくつもある。アルティン・トガ（訳注：Altyn-Tagh）の尾根に沿って、ヨーロッパ人の足がこれまで一度も踏み入れたことのない土壌に、深い峡谷に迷い込んだある集落がある。それは小さな家々の集まりで、修道院というよりはむしろ集落であり、その中に質素な寺院があり、近くに一人の老ラマ（隠者）が住んでいてそれを見張っているのである。巡礼者によると、地下の回廊や広間には蔵書があり、その数は大英博物館にも入りきらないほどだそうだ‡......。

†西チベットのカラコルム山脈。

‡同じ伝承によると、今は荒れ果てた水のないタリムの地は、トルキスタンの中心にある真の荒野で、昔は繁栄した裕福な都市で占められていたそうだ。しかし現在では、緑豊かなオアシスが、その荒涼とした雰囲気を和らげている。そのうちの1つは、砂漠の砂地に飲み込まれ埋もれた巨大都市の墓の上に作られたもので、誰のものでもないが、モンゴル人や仏教徒がよく訪れる場所である。同じ伝承では、地下に巨大な住居があり、タイルや

円柱で埋め尽くされた大きな回廊があるという。これは単なる噂かもしれないし、事実かもしれない。

　All this is very likely to provoke a smile of doubt. But then, before the reader rejects the truthfulness of the reports, let him pause and reflect over the following well known facts. The collective researches of the Orientalists, and especially the labours of late years of the students of comparative Philology and the Science of Religions have led them to ascertain as follows : An immense, incalculable number of MSS., and even printed works known to have existed, are now to be found no more. They have disappeared without leaving the slightest trace behind them. Were they works of no importance they might, in the natural course of time, have been left to perish, and their very names would have been obliterated from human memory. But it is not so ; for, as now ascertained, most of them contained the true keys to works still extant, and entirely incomprehensible, for the greater portion of their readers, without those additional volumes of Commentaries and explanations. Such are, for instance, the works of Lao-tse, the predecessor of Confucius.\*

\* “ If we turn to China, we find that the religion of Confucius is founded on the Five King and the Four Shu-books, in themselves of considerable extent and surrounded by voluminous Commentaries, without which even the most learned scholars would not venture to fathom the depth of their sacred canon.” (Lectures on the “ Science of Religion.” p. 185. Max Müller.) But they have not fathomed it—and this is the complaint of the Confucianists, as a very learned member of that body, in Paris, complained in 1881.

これはすべて、疑って笑われる可能性が非常に高い。しかし、読者がこの報告の真偽を否定する前に、次のような周知の事実について一歩立ち止まって考えてみてほしい。東洋学者の総力を挙げた研究、特に比較言語学と宗教学の研究者の近年の努力によって、次のようなことが確認された。膨大で計り知れない数の写本や、存在したことが知られている版本でさえ、今ではもう見つかっていない。それらはわずかな痕跡も残さずに消えてしまった。もし、それらの作品が重要でなかったなら、自然の成り行きで滅びるに任され、その名前そのものが人間の記憶から消し去られたかもしれない。しかし、そうではない。現在判明しているように、これらの作品の大部分は、現存する著作物の真の鍵を含んでおり、解説書や説明の追加巻がなければ、読者の大部分にとってまったく理解不能なものであったからだ。例えば、孔子の前任者である老子の著作がそうである\*。

\*「中国に目を向けると、孔子の宗教は四書五経に基づいており、それ自体はかなりの範囲で、詳細で長大な注釈が付されており、それなしには最も学識ある学者でさえもその聖典の深さを理解することを敢えてしないだろう」(Lectures on the “ Science of Religion.” p. 185. Max Muller.)。しかし、彼らはそれらの深さを分かっていない。これは、1881年にパリの儒教学会の非常に学識あるメンバーが訴えたことである。

　He is said to have written 930 books on Ethics and religions, and seventy on magic, one thousand in all. His great work, however, the heart of his doctrine, the “ Tao-te-King,” or the sacred scriptures of the Taosse, has in it, as Stanislas Julien shows, only “ about 5,000 words ” (Tao-te-King, p. xxvii.), hardly a dozen of pages, yet Professor Max Müller finds that “ the text is unintelligible without commentaries, so that Mr. Julien had to consult more than sixty commentators for the purpose of his translation,” the earliest going back as far as the year 163 B.C., not earlier, as we see. During the four centuries and a half that preceded this earliest of the commentators there was ample time to veil the true Lao-tse doctrine from all but his initiated priests. The Japanese, among whom are now to be found the most learned of the priests and followers of Lao-tse, simply laugh at the blunders and hypotheses of the European Chinese scholars ; and tradition affirms that the commentaries to which our Western Sinologues have access are not the real occult records, but intentional veils, and that the true commen- taries, as well as almost all the texts, have long since disappeared from the eyes of the profane.

彼は倫理と宗教に関する930冊の本と70冊の魔術に関する本を書き、全部で1000冊を書いたと言われている。しかし、彼の偉大な著作、つまり彼の教義の中心である『老子道徳経』（「道家」Taosseの聖典）は、スタニスラス・ジュリアンが示すように、「約5000語」（『老子道徳経』21ページ）に過ぎない。しかし、マックス・ミュラー博士は、「このテキストは注釈なしでは理解できないので、ジュリアン氏は翻訳のために60人以上の注釈者に相談しなければならなかった」と述べている。最も古いものは紀元前163年まで遡るが、我々が見る限り、それ以前には何もなかった。この最も古い注釈者より前の4世紀半の間、老子の真の教義を、老子のイニシエートを受けた（入門した）司祭以外のすべての人々から隠すのに十分な時間があったのである。日本人の中には、現在最も学識のある老子の司祭や信奉者がいるが、ヨーロッパの漢学者の誤りや仮説をただ笑うだけである。そして、我々の西洋の漢学者がアクセスできる解説書は、本当のオカルト記録ではなく、意図的にベールを被ったものであり、真の解説書やほとんどすべてのテキストは、長い間に俗人の目から消えてしまったことを伝統は断言している。

　If one turns to the ancient literature of the Semitic religions, to the Chaldean Scriptures, the elder sister and instructress, if not the fountain- head of the Mosaic Bible, the basis and starting-point of Christianity, what do the scholars find? To perpetuate the memory of the ancient religions of Babylon; to record the vast cycle of astronomical observa- tions of the Chaldean Magi ; to justify the tradition of their splendid and eminently occult literature, what now remains?—only a few fragments, said to be by Berosus.

　セム系宗教の古代文学に目を向けると、キリスト教の基礎であり出発点であるモーセの聖書（the Mosaic Bible）の源流とは言わないまでも、姉であり指導者であるカルデア聖書には、学者たちは何を見出すのだろうか。バビロンの古代宗教の記憶を永続させ、カルデアのマギの膨大な天体観測の周期を記録し、その華麗で非常にオカルト的な文献の伝統を正当化するために、今は何が残っているのだろうか。ベロッソス「によると言われている」わずかばかりの断片のみである。

　These, however, are almost valueless, even as a clue to the character of what has disappeared. For they passed through the hands of his Reverence the Bishop of Cæsarea—that self-constituted censor and editor of the sacred records of other men’s religions—and they doubtless bear to this day the mark of his eminently veracious and trustworthy hand. For what is the history of this treatise on the once grand religion of Babylon?

しかし、これらの資料は、消失した資料の特徴を知る手がかりとしてさえ、ほとんど価値がない。というのも、これらは彼の尊敬するカエサレアの司教の手を経たものであり、カエサレアの司教は他人の宗教の神聖な記録の検閲者、編集者として自認しており、彼の極めて正確で信頼できる手による痕跡が今日まで間違いなく残っているのである。バビロンのかつての壮大な宗教に関するこの論説の歴史はどうなっているのだろうか。

　Written in Greek by Berosus, a priest of the temple of Belus, for Alexander the Great, from the astronomical and chronological records preserved by the priests of that temple, and covering a period of 200,000 years, it is now lost. In the first century B.C. Alexander Polyhistor made a series of extracts from it—also lost. Eusebius used these extracts in writing his Chronicon (270—340 A.D.). The points of resemblance— almost of identity—between the Jewish and the Chaldean Scriptures,\* made the latter most dangerous to Eusebius, in his rôle of defender and champion of the new faith which had adopted the Jewish Scriptures, and with them an absurd chronology. It is pretty certain that Eusebius did not spare the Egyptian Synchronistic tables of Manetho—so much so that Bunsen† charges him with mutilating history most unscrupu- lously. And Socrates, a historian of the fifth century, and Syncellus, vice-patriarch of Constantinople (eighth century), both denounce him as the most daring and desperate forger.

\* Found out and proven only now, through the discoveries made by George Smith (vide his “ Chaldean account of Genesis ”), and which, thanks to this Armenian forger, have misled all the civilized nations for over 1,500 years into accepting Jewish derivations for direct Divine Revelation !

† Bunsen’s “ Egypt’s Place in History,” vol. i. p. 200

ベルス神殿の司祭ベロッソスがアレキサンダー大王のために、同神殿の司祭が保存していた天文・年代記録からギリシャ語で書いたもので、20万年の期間をカバーしているが、現在ではそれは失われている。紀元前１世紀、アレクサンドロス・ポリュヒストルがこの書物から一連の抄本を作成したが、これも失われている。エウセビオスが『クロニコン』（西暦270-340年）の執筆に際して、この抄本を使用した。ユダヤの聖典とカルデアの聖典\*の間には、ほとんど同一と言ってよいほどの類似点があり、後者は、ユダヤの聖典と不合理な年表を採用した新しい信仰の擁護者と支持者の役割を担うエウセビオスにとって、最も危険なものであった。エウセビオスがマネトのエジプト史を惜しみなく使ったことは確かであり、ブンゼン†は彼を歴史の無節操な切り取りと非難しているほどである。５世紀の歴史家ソクラテスと８世紀のコンスタンチノープルの副首長シュンケロスは、彼を最も大胆で絶望的な偽造者として非難している。

\*ジョージ・スミスの発見（彼の「創世記のカルデア的説明」参照）により、今になってようやく発見され、証明されたのである。このアルメニア人の偽造者のおかげで、1500年以上にわたってすべての文明国は欺かれ、ユダヤ人の創作を直接の神の啓示として受け入れてきたのである！

†ブンゼンの “ Egypt’s Place in History,” vol.i. p.200

　Is it likely, then, that he dealt more tenderly with the Chaldean records, which were already menacing the new religion, so rashly accepted ?

　ということは、彼は拙速に受け入れた新宗教をすでに脅かしていたカルデアの記録を、もっと大切に扱ったのだろうか？

　So that, with the exception of these more than doubtful fragments, the entire Chaldean sacred literature has disappeared from the eyes of the profane as completely as the lost Atlantis. A few facts that were contained in the Berosian History are given in Part II. of Vol. II., and may throw a great light on the true origin of the Fallen Angels, personified by Bel and the Dragon.

そのため、これらの疑わしい断片を除いて、カルデアの聖典全体は失われたアトランティスのように完全に俗人の目から消えてしまったのである。Berosian Historyに含まれていたいくつかの事実は、第二巻の第二部に記載されており、ベル（訳注：バビロニア・アッシリア神話でベルとは、天と地の神）とドラゴンに擬人化された堕天使の真の起源に大きな光を投げかけるのかもしれない。

　Turning now to the oldest Aryan literature, the Rig-Veda, the student will find, following strictly in this the data furnished by the said Orientalists themselves, that, although the Rig-Veda contains only “ about 10,580 verses, or 1,028 hymns,” in spite of the Brâhmanas and the mass of glosses and commentaries, it is not understood correctly to this day. Why is this so ? Evidently because the Brâhmanas, “ the scholastic and oldest treatises on the primitive hymns,” themselves require a key, which the Orientalists have failed to secure.

次に、最古のアーリア文学であるリグ＝ヴェーダに目を向けると、東洋学者が提供した資料に忠実に従えばリグ＝ヴェーダには「約10,580節、讃美歌1028曲」があるだけで、ブラーフマナや大量の注釈書や解説書にもかかわらず、今日まで正しく理解されていないことがわかるだろう。なぜだろう？ 明らかに、「原始的な讃美歌に関する学術的かつ最古の論文」である『ブラーフマナ』自体が、東洋学者が確保できなかった鍵を必要とするからである。

　What do the scholars say of Buddhist literature? Have they got it in its completeness ? Assuredly not. Notwithstanding the 325 volumes of the Kanjur and the Tanjur of the Northern Buddhists, each volume we are told, “ weighing from four to five pounds,” nothing, in truth, is known of Lamaism. Yet, the sacred canon of the Southern Church is said to contain 29,368,000 letters in the Saddharma alankâra,\* or, exclusive of treatises and commentaries, “ five or six times the amount of the matter contained in the Bible,” the latter, in the words of Professor Max Müller, rejoicing only in 3,567,180 letters. Not- withstanding, then, these “ 325 volumes ” (in reality there are 333, Kanjur comprising 108, and Tanjur 225 volumes), “ the translators, instead of supplying us with correct versions, have interwoven them with their own commentaries, for the purpose of justifying the dogmas of their several schools.”† Moreover,“according to a tradition preserved by the Buddhist schools, both of the South and of the North, the sacred Buddhist Canon comprised originally 80,000 or 84,000 tracts, but most of them were lost, so that there remained but 6,000,” the professor tells his audiences. “ Lost ” as usual for Europeans. But who can be quite sure that they are likewise lost for Buddhists and Brahmins ?

\* Spence Hardy, “The Legends and Theories of the Buddhists,” p. 66.

† “ Buddhism in Tibet,” p. 78.

　学者たちは仏教文学をどう評価しているのだろうか。彼らはそれを完全に手に入れたのだろうか？もちろん、そうではない。北伝仏教徒の『カンジュール』と『タンジュール』は325巻もあり、各巻の重さは「4?5ポンド」と言われているが、実はラマ教については何も知られていないのである。しかし、南方教会（Southern Church）の聖典は、『サッダルマ・アランカーラ』\*に29,368,000字、つまり、論文や注釈を除くと「聖書に含まれる事柄の5、6倍」の量を含んでいると言われており、後者は、マックスミュラー教授の言葉によれば、3,567,180字で喜んでいるにすぎないのである。「この〈325巻〉（実際には333巻で、カンジュールは108巻、タンジュールは225巻）にもかかわらず、翻訳者は正しい版を提供する代わりに、それぞれの学派の教義を正当化する目的で、自分の注釈を織り交ぜている」†。しかも、「南と北の仏教の宗派に伝わる伝承では、仏教の聖典はもともと8万または8万4千巻あったが、そのほとんどが失われ、6千巻しか残っていない」と、教授は聴衆に語る。ヨーロッパ人の常として「失われた」のである。しかし、仏教徒やバラモン教徒にとっても同様に失われたと、誰が断言できるだろうか？

\* Spence Hardy, “The Legends and Theories of the Buddhists,” p. 66.

† “ Buddhism in Tibet,” p. 78.

　Considering the sacredness for the Buddhists of every line written upon Buddha or his “ Good Law,” the loss of nearly 76,000 tracts does seem miraculous. Had it been vice versâ, every one acquainted with the natural course of events would subscribe to the statement that, of these 76,000, five or six thousand treatises might have been destroyed during the persecutions in, and emigrations from, India. But as it is well ascertained that Buddhist Arhats began their religious exodus, for the purpose of propagating the new faith beyond Kashmir and the Himalayas, as early as the year 300 before our era,\* and reached China in the year 61 a.d.† when Kashyapa, at the invitation of the Emperor Ming-ti, went there to acquaint the “ Son of Heaven ” with the tenets of Buddhism, it does seem strange to hear the Orientalists speaking of such a loss as though it were really possible. They do not seem to allow for one moment the possibility that the texts may be lost only for West and for themselves; or, that the Asiatic people should have the unparalleled boldness to keep their most sacred records out of the reach of foreigners, thus refusing to deliver them to the profanation and misuse of races even so “ vastly superior ” to themselves.

\* Lassen, (“ Ind. Althersumkunde ” Vol. II, p. 1,072) shows a Buddhist monastery erected in the Kailas range in 137 B.C. ; and General Cunningham, earlier than that.

† Reverend T. Edkins, “ Chinese Buddhism.”

　仏陀やその「善法」について書かれた一行一行が仏教徒にとって神聖なものであることを考えると、76,000冊近くが失われたのは奇跡的なことであるように思える。もしその逆であれば、自然の成り行きを知る者は皆、この76,000冊のうち5、6千冊はインドでの迫害やインドからの移住の際に破壊されていたかもしれないという声明に同意するだろう。しかし、仏教の羅漢（アルハット）たちは、カシミールやヒマラヤ山脈を越えて新しい信仰を広めるために、我々の時代より300年も早く宗教的な旅を始め\*、西暦61年に中国に到達したことがよく確認されている†。カシュヤパが明帝の招きで中国に渡り、「天子」に仏教の教えを説いた時である。仏教の教義に照らしてみると、東洋学者がそのような損失が本当にあり得るかのように話しているのを聞くと、不思議な感じがする。東洋学者は、テキストが西洋と自分たちだけのせいで失われる可能性を、一瞬たりとも許すことはないようだ。または彼らは、アジア諸国の人々が自分たちの最も神聖な記録を外国人の手の届かないところに置き、自分たちより「はるかに優れた」民族の冒涜や誤用にさらすことを拒否するという、他に類を見ない大胆さを持つことも、一瞬たりとも許すことができないようだ。

\*ラッセン(" Ind. Althersumkunde " Vol. II, p. 1,072)

は、カイラス山脈に紀元前137年に建てられた仏教僧院を示し、カニンガム将軍はそれより前に建てたと述べている。

† Reverend T. Edkins, “ Chinese Buddhism.”

　Owing to the expressed regrets and numerous confessions of almost every one of the Orientalists (See Max Müller’s Lectures for example) the public may feel sufficiently sure (a) that the students of ancient religions have indeed very few data upon which to build such final conclusions as they generally do about the old religions, and (b) that such lack of data does not prevent them in the least from dogmatising. One would imagine that, thanks to the numerous records of the Egyptian theogony and mysteries preserved in the classics, and in a number of ancient writers, the rites and dogmas of Pharaonic Egypt ought to be well understood at least; better, at any rate, than the too abstruse philosophies and Pantheism of India, of whose religion and language Europe had hardly any idea before the beginning of the present century. Along the Nile and on the face of the whole country, there stand to this hour, exhumed yearly and daily, fresh relics which eloquently tell their own history. Still it is not so. The learned Oxford philologist himself confesses the truth by saying that “ Though . . . we see still standing the Pyramids, and the ruins of temples and labyrinths, their walls covered with hieroglyphic inscriptions, and with the strange pictures of gods and goddesses. . . . . On rolls of papyrus, which seem to defy the ravages of time, we have even fragments of what may be called the sacred books of the Egyptians; yet, though much has been deciphered in the ancient records of that mysterious race, the main- spring of the religion of Egypt and the original intention of its cere- monial worship are far from being fully disclosed to us.”\* Here again the mysterious hieroglyphic documents remain, but the keys by which alone they become intelligible have disappeared.

\* So little acquainted are our greatest Egyptologists with the funerary rites of the Egyptians and the outward marks of the difference of sexes made on the mummies, that it has led to the most ludicrous mistakes. Only a year or two since, one of that kind was discovered at Boulaq, Cairo. The mummy of what had been considered the wife of an unimportant Pharaoh, has turned out, thanks to an inscription found on an amulet hung on his neck, to be that of Sesostris—the greatest King of Egypt !

東洋学者のほとんど全員が遺憾の意を表明し、数多くの告白をしている（たとえばマックス・ミュラーの講義を参照）ので、一般の人々は、（a）古代宗教の研究者は、古代宗教について一般的に行われているような最終的な結論を下すためのデータをほとんど持っていないこと、そして（b）そのようなデータの欠如が、独断的な主張を妨げることはまったくないことを、十分に理解できるだろう。古典に残されているエジプトの神話と神秘に関する多くの記録のおかげで、そして多くの古代の作家のおかげで、ファラオ時代のエジプトの儀式と教義は少なくともよく理解されているはずだと想像するだろう。いずれにせよ、今世紀初頭までヨーロッパがその宗教と言語についてほとんど知らなかったインドのあまりにも難解な哲学や汎神論よりはましだ。ナイル川沿いや国土の表面には、今日まで、毎年、毎日、雄弁に自らの歴史を語る新鮮な遺物が発掘され、そこに立っている。でも、そうではない。オックスフォード大学の言語学者自身が、次のように真実を告白している。「……ピラミッドや神殿や迷宮の遺跡がまだ残っていて、その壁には象形文字が刻まれ、神や女神の奇妙な絵が描かれている……。パピルスの巻物には、エジプト人の神聖な本と呼ばれるものの断片さえある。しかし、その神秘的な民族の古代の記録から多くのことが解読されたとはいえ、エジプトの宗教の本源とその儀式的崇拝の本来の意図は、私たちに完全に開示されるにはほど遠いものだ」\*。ここでも神秘的な象形文字の文書が残っているが、それらを理解するための鍵は消失している。

\*エジプト人の葬送儀礼やミイラに見られる男女の違いを示す痕跡について、我々の偉大なエジプト学者たちはほとんど知らないため、非常におかしな間違いが生じている。わずか1、2年前、カイロのブーラークでそのようなものが発見された。重要でないファラオの妻と考えられていたミイラが、首にかけられていたお守りの碑文のおかげで、エジプト最大の王セソストリスのものであることが判明したのだ！

　Nevertheless, having found that “ there is a natural connection between language and religion ” ; and, secondly, that there was a common Aryan religion before the separation of the Aryan race; a common Semitic religion before the separation of the Semitic race ; and a common Turanian religion before the separation of the Chinese and the other tribes belonging to the Turanian class; having, in fact, only discovered “ three ancient centres of religion ” and “ three centres of language,” and though as entirely ignorant of those primitive religions and languages, as of their origin, the professor does not hesitate to declare “ that a truly historical basis for a scientific treatment of those principal religions of the world has been gained ! ”

　しかし、「言語と宗教の間には自然なつながりがある」こと、第二に、アーリア人種の分離以前には共通のアーリア人の宗教があり、セム族の分離以前には共通のセム族の宗教があり、中国人とトゥラン語族に属する他の部族の分離以前には共通のトゥラン語系民族の宗教があったことが発見されたのである。実際には「古代の三つの宗教の中心」と「三つの言語の中心」が発見されただけで、それらの原初的な宗教と言語については、その起源についてもまったく無知であるにもかかわらず、教授は「世界の主要な宗教を科学的に扱うための真に歴史的な基礎が得られた！」と躊躇なく宣言しているのである。

　A “ scientific treatment ” of a subject is no guarantee for its “ historical basis”; and with such scarcity of data on hand, no philologist, even among the most eminent, is justified in giving out his own conclusions for “historical“ facts. No doubt, the eminent Orientalist has proved thoroughly to the world’s satisfaction, that according to Grimm’s law of phonetic rules, Odin and Buddha are two different personages, quite distinct from each other, and he has shown it “scientifically“. When, however he takes the opportunity of saying in the same breath that Odin “ was worshipped as the supreme deity ‘during a period long anterior to the age of the Veda‘ and of Homer ” (Compar. Theol., p. 318), he has not the slightest “ historical basis ” for it. He makes “history“ and “fact“ subservient to his own conclusions, which may be very “scientific,” in the sight of Oriental scholars, but yet very wide of the mark of actual truth. The conflicting views on the subject of chronology, in the case of the Vedas, of the various eminent philologists and Orientalists, from Martin Haug down to Mr. Max Müller himself, are an evident proof that the statement has no “historical“ basis to stand upon, “internal evidence” being very often a Jack-o’-lantern, instead of a safe beacon to follow. Nor has the Science of modern Comparative Mythology any better proof to show, that those learned writers, who have insisted for the last century or so that there must have been “ fragments of a primeval revelation, granted to the ancestors of the whole race of mankind . . . . preserved in the temples of Greece and Italy,” were entirely wrong. For this is what all the Eastern Initiates and Pundits have been proclaiming to the world from time to time. While a prominent Cinghalese priest assured the writer that it was well known that the most important Buddhist tracts belonging to the sacred canon were stored away in “countries and places inaccessible to the European pundits“, the late Swami Dayanand Sarasvati, the greatest Sanskritist of his day in India, assured some members of the Theosophical Society of the same fact with regard to ancient Brahmanical works. When told that Professor Max Müller had declared to the audiences of his “ Lectures ” that the theory . . . . “ that ‘there was a primeval preternatural revelation‘ granted to the fathers of the human race, finds but few supporters at present,”—the holy and learned man laughed. His answer was suggestive. “ If Mr. ‘Moksh Mooller‘, as he pronounced the name, were a Brahmin, and came with me, I might take him to a “gupta“ cave (a secret crypt) near Okhee Math, in the Himalayas, where he would soon find out that what crossed the “Kalapani“ (the black waters of the ocean) from India to Europe were only the “bits of rejected copies of some passages from our sacred books“. There “was“ a “primeval revelation,” and it still exists ; nor will it ever be lost to the world, but will reappear ; though the Mlechchhas will of course have to wait.”

ある主題の「科学的扱い」は、その「歴史的根拠」を保証するものではない。手元にあるデータがこれほど乏しい以上、言語学者は、たとえ最も高名な者であっても、自分自身の結論を「歴史的」事実として述べることを正当化されることはないのである。グリムの音声法則（訳注：[言]Jacob Grimmが発表した印欧基語からゲルマン基語への子音推移に関する法則）によれば、オーディン（訳注：北欧神話]で知識・文化・軍事をつかさどる最高神）とブッダは別人格であり、互いに全く異なる存在であることを、高名な東洋学者が世界が満足するように徹底的に証明し、それを「科学的に」証明したのは間違いないだろう。しかし、オーディンが「『ヴェーダ』やホメロスの時代よりもずっと前の時代に最高神として崇拝されていた」（Compar. Theol., p.318）と言うとき、その人はその「歴史的根拠」を少しも持ち合わせていないのである。彼は「歴史」と「事実」を自分の結論に従わせるが、それは東洋の学者から見れば非常に「科学的」かもしれないが、実際の真実からは大きく外れている。マルティン・ハウグからマックス・ミュラーに至るまで、様々な著名な言語学者や東洋学者が、ヴェーダの年代測定というテーマで相反する見解を示していることは、この記述が「歴史的」根拠を持っていないことの明白な証拠であり、「内部証拠」はしばしば安全な標識ではなく、カボチャのランタンになるのである。また、現代の比較神話学には、前世紀くらい前から「ギリシャやイタリアの寺院に保存されている、全人類の祖先に与えられた太古の啓示の断片」があるはずだと主張してきた学者たちが完全に間違っていたことを示す、これ以上の証拠はない。なぜなら、それこそが東洋のすべてのイニシエートと賢者たちが、折に触れて世界に宣言してきたことだからである。ある著名なチンハラ（シンハラ）人の僧侶は、神聖な聖典に属する最も重要な仏教の小冊子が「ヨーロッパの識者には近づけない国や場所」に保管されていることはよく知られていることだと著者に保証したが、当時のインド最大のサンスクリット学者、故スワミ・ダヤナンド・サラスバティは、古代バラモン教の著作に関して同じ事実を神智学協会の一部の会員に保証してくれたのだ。マックス・ミュラー教授が自称「講義」の聴衆に向かって、「人類の祖先に与えられた『〈原初の超自然的啓示〉があった』という説は、現在ではほとんど支持されていない」と宣言したと聞かされたとき、聖者で学識ある人は笑った。そのお方の答えは示唆に富んでいた。「もし、モクシュ・ムーラーさんと名乗る人がバラモン教徒で、私と一緒に来るなら、ヒマラヤのOkhee Mathの近くにある「グプタ」洞窟（秘密の地下室）に連れて行くかもしれない。そこへ行けばすぐに、インドから［カラパニ］（海の黒い水）を渡ってヨーロッパへ来たものは、［私たちの聖典の一節を複写した断片］に過ぎないことがわかるだろう。［原初の啓示］は〈あった〉のであり、そしてまだ存在している。そして、それは世界から失われることはなく、再び現れるだろう。ムレッチャ（訳注：古代インドにおける未開の外国人）たちはもちろん待たされるだろうけれど」。

　Questioned further on this point, he would say no more. This was at Meerut, in 1880.

この点についてさらに質問すると、彼はそれ以上語ろうとしなかった。1880年、メーラト（訳注：インド北部 Uttar Pradesh北西部の市）でのことだった。

　No doubt the mystification played, in the last century at Calcutta, by the Brahmins upon Colonel Wilford and Sir William Jones was a cruel one. But it had been well deserved, and no one was more to be blamed in that affair than the Missionaries and Colonel Wilford themselves. The former, on the testimony of Sir William Jones himself (see Asiat. Res., Vol. i., p. 272), were silly enough to maintain that “ the Hindus were even now almost Christians, because their Brahmâ, Vishnu and Mahesa were no other than the Christian trinity.”\* It was a good lesson. It made the Oriental scholars doubly cautious; but perchance it has also made some of them too shy, and caused, in its reaction, the pendulum of foregone conclusions to swing too much the other way. For “ that first supply on the Brahmanical market,” made for Colonel Wilford, has now created an evident necessity and desire in the Orientalists to declare nearly every archaic Sanskrit manuscript so modern as to give to the missionaries full justification for availing themselves of the opportunity. That they do so and to the full extent of their mental powers, is shown by the absurd attempts of late to prove that the whole Purânic story about Chrishna was “plagiarized by the Brahmins from the Bible!“ But the facts cited by the Oxford Professor in his Lectures on the “Science of Religion,” concerning the now famous interpolations, for the benefit, and later on to the sorrow, of Col. Wilford, do not at all interfere with the conclusions to which one who studies the Secret Doctrine must unavoidably come. For, if the results show that neither the “New“ nor even the “Old“ Testament borrowed anything from the more ancient religion of the Brahmans and Buddhists, it does not follow that the Jews have not borrowed all they knew from the Chaldean records, the latter being mutilated later on by Eusebius. As to the Chaldeans, they assuredly got their primitive learning from the Brahmans, for Rawlinson shows an undeniably Vedic influence in the early mythology of Babylon; and Col. Vans Kennedy has long since justly declared that Babylonia was, from her origin, the seat of Sanskrit and Brahman learning. But all such proofs must lose their value, in the presence of the latest theory worked out by Prof. Max Müller. What it is everyone knows. The code of phonetic laws has now become a universal solvent for every identification and “ connection ” between the gods of many nations. Thus, though the Mother of Mercury (Budha, Thot-Hermes, etc.), was Maïa, the mother of Buddha (Gautama), also Mâyâ, and the mother of Jesus, likewise Maya (illusion, for Mary is “Mare“, the Sea, the great illusion symbolically)—yet these three characters have no connection, nor can they have any, since Bopp has “ laid down his code of phonetic laws.”

\*See Max Müller’s “ Introduction to the Science of Religion.” Lecture “On False Analogies in comparative Theology“, pp. 288 and 296 et seq. This relates to the clever forgery (on leaves inserted in old Purânic MSS.), in correct and archaic Sanskrit, of all that the Pundits of Col. Wilford had heard from him about Adam and Abraham, Noah and his three sons, etc., etc

前世紀、カルカッタでバラモン教徒たちがウィルフォード大佐とウィリアム・ジョーンズ卿に対して行ったあいまい化は、間違いなく残酷なものであった。しかし、それは当然のことであり、この件に関して宣教師とウィルフォード大佐自身以上に非難されるべき者はいなかった。前者はウィリアム・ジョーンズ卿自身の証言（Asiat.Res.Vol.1、272頁参照）の中の言葉で、「ヒンズー教徒は現在でさえほとんどキリスト教徒同じであり、そのブラフマー、ヴィシュヌ、マヘサ（訳注：シヴァのこと）はキリスト教徒の三位一体に他ならない」\*と主張するほど愚かだった。これは良い教訓だった。東洋学者たちを二倍も慎重にさせたが、その反動で、一部の学者たちは恥ずかしがり屋になりすぎ、既成の結論の振り子を逆に振りすぎてしまったようである。ウィルフォード大佐のために行われた「バラモン教市場への最初の供給」は、今や東洋学者に、ほとんどすべてのサンスクリット語の古語の写本を、宣教師たちがその機会を利用することを十分に正当化できるほどモダン（新しい）であると宣言する明白な必要性と欲求を生じさせたからである。このことと、彼らの精神力の及ぶ限りによって、クリシュナに関する『プラーナ』のストーリー全体が「バラモンによって聖書から盗用された」ことを証明しようとする最近のばかげた試みが示されている。しかし、オックスフォード大学の教授が「宗教の科学」についての講義で引用した、今では有名な改竄に関する事実は、ウィルフォード大佐の、そして後には悲しむことになったが『シークレット・ドクトリン』を研究する者が不可避的に到達しなければならない結論の、妨げには全くならないのである。もし「新約聖書」そして「旧約聖書」さえもバラモン教徒や仏教徒のより古代の宗教から何も借りていないという結果が出たとしても、ユダヤ人がカルデアの記録から、彼らが知っているすべてを借りていなかったということにはならないからである。後者（旧約聖書）は後にエウセビオスによって改竄された。カルデア人がバラモンから根本的な学問を学んだことは確かである。ローリンソンはバビロンの初期の神話に紛れもなくヴェーダの影響があることを示し、バンス・ケネディ大佐は、バビロニアがその起源からサンスクリット語とバラモンの学問の拠点であったと長いこと正当に宣言してきたのである。しかし、マックス・ミュラー教授による最新の理論の前では、こうした証明はすべて価値を失うに違いない。それが何であるかは、誰もが知っている。音法則の記号は、今や多くの国の神々の間のあらゆる識別（ID）と「結びつき」のための普遍的な説明となっている。したがって、水星（ブダ、トート・ヘルメスなど）の母はマイアであり、仏陀（ゴータマ）の母もマーヤーであり、イエスの母もマヤ（幻影。マリア［Mary］は象徴的に「海」、大いなる幻影）である。しかし、ボップ（訳注：Franz

Bopp ［1791～1867］ドイツの言語学者）が「彼の音法則の記号を定めた」ので、この三つの人物と何の関連性もないし、あるわけもないのである。

\*マックス・ミュラー著“Introduction to the Science of Religion” レクチャー“On False Analogies in comparative Theology“（「比較神学における誤った類推について」）pp.288, 296 参照。これは、ウィルフォード大佐の批評家たちがアダムとアブラハム、ノアとその３人の息子などについて彼から聞いたことを、古風で正確なサンスクリット語で巧妙に偽造したものである（古い『プラーナ』の写本に挿入されたページがそれである）。

　In their efforts to collect together the many skeins of unwritten history, it is a bold step for our Orientalists to take, to deny, “a priori“, everything that does not dovetail with their special conclusions. Thus, while new discoveries are daily made of great arts and sciences having existed far back in the night of time, even the knowledge of writing is refused to some of the most ancient nations, and they are credited with barbarism instead of culture. Yet the traces of an immense civiliza- tion, even in Central Asia, are still to be found. This civilization is undeniably “prehistoric“. And how can there be civilization without a literature, in some form, without annals or chronicles ? Common sense alone ought to supplement the broken links in the history of departed nations. The gigantic, unbroken wall of the mountains that hem in the whole table-land of Tibet, from the upper course of the river Khuan-Khé down to the Kara-Korum hills, witnessed a civilization during millenniums of years, and would have strange secrets to tell mankind. The Eastern and Central portions of those regions—the Nan-Schayn and the Altyne-taga—were once upon a time covered with cities that could well vie with Babylon. A whole geological period has swept over the land, since those cities breathed their last, as the mounds of shifting sand, and the sterile and now dead soil of the immense central plains of the basin of Tarim testify. The borderlands alone are superficially known to the traveller. Within those table-lands of sand there is water, and fresh oases are found blooming there, wherein no European foot has ever yet ventured, or trodden the now treacherous soil. Among these verdant oases there are some which are entirely inaccessible even to the native profane traveller. Hurricanes may “ tear up the sands and sweep whole plains away,” they are powerless to destroy that which is beyond their reach. Built deep in the bowels of the earth, the subterranean stores are secure ; and as their entrances are concealed in such oases, there is little fear that anyone should discover them, even should several armies invade the sandy wastes where—

　“Not a pool, not a bush, not a house is seen,

　And the mountain-range forms a rugged screen Round the parch’d flats of the dry, dry desert. . . . .”

　東洋学者が、書き残されていない多くの歴史の糸巻きを巻き返して集めようとするとき、自分たちの特別な結論に合致しないものはすべて「先験的」に否定するという大胆な手段をとる。こうして、偉大な芸術や科学がはるか昔の時代に存在していたという新しい発見が日々なされる一方で、最も古い国々の中には文字の知識さえも拒否され、文化の代わりに野蛮であるとされる国もあるのだ。しかし、中央アジアにさえ、まだ発見されていない巨大な文明の痕跡が残っているのである。この文明は紛れもなく「先史時代」である。そして、文学が何らかの形で存在せず、年譜や年代記のない文明などあり得るだろうか。常識的に考えて、亡国の歴史の断絶を補うべきだろう。チベットの台地全体を縁取る巨大で切れ目のない山の壁は、クアンケ（Khuan-Khe）川の上流からカラコルム丘陵まで、何千年にもわたって文明を目撃し、人類に伝えるべき知られざる秘密を持っているはずである。その砂の台地には水があり、新鮮なオアシスが広がっているが、そこにはヨーロッパ人の足はまだ一度も踏み入れたことがなく、今は危険（不安定）な土壌を踏むこともない。これらの青々としたオアシスの中には、現地の世俗の旅行者ですら全く立ち入ることができないものもある。ハリケーンは「砂を引き裂き、平野を一掃する」かもしれないが、手の届かないところにあるものを破壊する力はない。地中深くに作られた地下貯蔵所は安全で、その入り口はオアシスに隠されているため、たとえ数人の軍隊が砂の荒野に侵入したとしても、誰かに発見される心配はほとんどない。そこは、

「水たまりも、潅木も、家も見あたらない。

そして山脈は乾いた砂漠の干からびた平地を囲む頑丈な障壁を形成している……」。

　But there is no need to send the reader across the desert, when the same proofs of ancient civilization are found even in comparatively populated regions of the same country. The oasis of Tchertchen, for in- stance, situated about 4,000 feet above the level of the river Tchertchen- D’arya, is surrounded with the ruins of archaic towns and cities in every direction. There, some 3,000 human beings represent the relics of about a hundred extinct nations and races—the very names of which are now unknown to our ethnologists. An anthropologist would feel more than embarrassed to class, divide and subdivide them; the more so, as the respective descendants of all these “antediluvian“ races and tribes know as little of their own forefathers themselves, as if they had fallen from the moon. When questioned about their origin, they reply that they know not whence their fathers had come, but had heard that their “first“ (or earliest) men were ruled by the great genii of these deserts. This may be put down to ignorance and superstition, yet in view of the teachings of the Secret Doctrine, the answer may be based upon primeval tradition. Alone, the tribe of Khoorassan claims to have come from what is now known as Afghanistan, long before the days of Alexander, and brings legendary lore to that effect as corroboration. The Russian traveller, Colonel (now General) Prjevalsky, found quite close to the oasis of Tchertchen, the ruins of two enormous cities, the oldest of which was, according to local tradition, ruined 3,000 years ago by a hero and giant ; and the other by the Mongolians in the tenth century of our era. “The emplacement of the two cities is now covered, owing to shifting sands and the desert wind, with strange and heterogeneous relics ; with broken china and kitchen utensils and human bones. The natives often find copper and gold coins, melted silver, ingots, diamonds, and turquoises, and what is the most remarkable—broken glass. . . . .” “Coffins of some undecaying wood, or material, also, within which beautifully preserved embalmed bodies are found. . . . . The male mummies are all extremely tall powerfully built men with long waving hair. . . . . A vault was found with twelve dead men “sitting“ in it. Another time, in a separate coffin, a young girl was discovered by us. Her eyes were closed with golden discs, and the jaws held firm by a golden circlet running from under the chin across the top of the head. Clad in a narrow woollen garment, her bosom was covered with golden stars, the feet being left naked.” (From a lecture by N. M. Prjevalsky.) To this, the famous traveller adds that all along their way on the river Tchertchen they heard legends about twenty-three towns buried ages ago by the shifting sands of the deserts. The same tradition exists on the Lob-nor and in the oasis of Kerya.

しかし、読者を砂漠に向かわせる必要はない。同じ国の比較的人口の多い地域でも、古代文明の同じ証拠が見られるからである。例えば、チェルチェン川の水位から約4000フィートの高さにあるチェルチェンのオアシスは、四方を古代の町や都市の遺跡で囲まれている。そこには約3000人の人間がおり、その中には現在では民族学者にその名を知られていない、およそ100の絶滅した国や民族の遺物が含まれている。人類学者なら、それらを分類し、分割し、細分化するのに困惑以上のことを感じるだろう。それ以上に、これらすべての「先史時代」の民族や部族のそれぞれの子孫は、自分たちの先祖についてまるで月から落ちてきたかのようにほとんど知らないため、そうであろう。自分たちの起源について質問されると、自分たちの父親がどこから来たのか知らないが、「最初の」（あるいは最も古い）人々はこの砂漠の偉大な神々に支配されていたと聞いたことがある、と答えるのである。これは無知と迷信のせいかもしれないが、『シークレット・ドクトリン』の教えからすれば、その答えは太古の伝承に基づくものかもしれない。ホラーサーンの部族は、アレキサンダーの時代よりもずっと以前に現在のアフガニスタンから来たと主張し、その裏付けとして伝説的な伝承を持ってくる。ロシアの旅行者、プリジェヴァルスキー大佐（現大将）は、チェルチェンのオアシスのすぐ近くに、2つの巨大な都市の遺跡を発見した。そのうちの最も古いものは、地元の伝承によれば3千年前に英雄と巨人が破壊したもので、もう一つは、現代の10世紀にモンゴル人が破壊したものである。「この2つの都市の跡地は、砂の移動と砂漠の風のために、壊れた陶磁器や台所用品、人骨など、奇妙で異質な遺物で覆われている。原住民はしばしば銅貨や金貨、溶けた銀、インゴット、ダイヤモンド、ターコイズ、そして最も注目すべきは割れたガラスを発見する。……」。「朽ち果てない木製の棺や、美しく保存された防腐処理された遺体が入っている棺もある。……男性のミイラは、全て非常に背が高く、力強い体格で、 髪は長く伸びている . . . ある納骨堂では、12人の死者が〈座って〉いるのが発見された。別の時には別の棺桶の中で、若い女の子が私たちによって発見された。彼女の目は黄金の円盤で閉じられており、顎の下から頭頂部を横切る黄金のサークレット（飾り環）で顎を固めていた。毛織りの細い衣をまとい、胸元は黄金の星で覆われ、足は裸のままであった」（N. M. Prjevalskyの講演から）。これに、この有名な旅行者はチェルチェン川の道中で、昔、砂漠の砂の移動によって埋められた23の町についての伝説を聞いたと付け加えている。ロブノール川やケリヤのオアシスにも同じような言い伝えがある。

　The traces of such civilization, and these and like traditions, give us the right to credit other legendary lore warranted by well educated and learned natives of India and Mongolia, when they speak of immense libraries reclaimed from the sand, together with various reliques of ancient magic lore, which have all been safely stowed away.

このような文明の痕跡、そしてこのような伝承は、インドやモンゴルのよく教育され学識のある原住民が、砂から救った巨大な図書館と古代の魔術伝承のさまざまな遺物が、すべて安全に保管されていると話すときに、彼らが保証する他の伝説的伝承を信用する権利を私たちに与える。

　To recapitulate. The Secret Doctrine was the universally diffused religion of the ancient and prehistoric world. Proofs of its diffusion, authentic records of its history, a complete chain of documents, show- ing its character and presence in every land, together with the teaching of all its great adepts, exist to this day in the secret crypts of libraries belonging to the Occult Fraternity.

　要約すると、「シークレット・ドクトリン」（秘密の教義）は古代および先史時代の世界において普遍的に広まった宗教であった。その普及の証拠、その歴史の本物の記録、その特徴とあらゆる国での存在を示す完全な一連の文書、そしてそのすべての偉大なアデプト（熟練者）の教えは、今日までオカルト同胞団のものである図書館の秘密の地下室に存在している。

　This statement is rendered more credible by a consideration of the following facts : the tradition of the thousands of ancient parchments saved when the Alexandrian library was destroyed ; the thousands of Sanskrit works which disappeared in India in the reign of Akbar; the universal tradition in China and Japan that the true old texts with the commentaries, which alone make them comprehensible—amounting to many thousands of volumes—have long passed out of the reach of profane hands ; the disappearance of the vast sacred and occult literature of Babylon; the loss of those keys which alone could solve the thousand riddles of the Egyptian hieroglyphic records ; the tradition in India that the real secret commentaries which alone make the Veda intelligible, though no longer visible to profane eyes, still remain for the initiate, hidden in secret caves and crypts; and an identical belief among the Buddhists, with regard to their secret books.

　この声明は、次のような事実を考慮すると、より信憑性が高まる。アレクサンドリア図書館が破壊されたときに保存された何千枚もの古代の羊皮紙、アクバルの治世にインドで消失した何千ものサンスクリット語の著作、中国と日本の普遍的な言い伝えの真の古いテキストとそれを理解するための唯一の解説書（何千冊にも及ぶ）は、長い間俗人の手の届かないところにあったこと、などである。バビロンの膨大な聖典とオカルト文学の消滅、エジプトの象形文字記録の千の謎を解くたった一つの鍵の喪失、インドではヴェーダを理解可能にする本物の秘密の解説書はもはや俗人の目には見えないが、秘伝の洞窟や地下室に隠され、秘伝を受ける者（イニシエート）のためにまだ残っているという伝統、仏教徒たちの秘密の書に関する同じ信仰などだ。

　The Occultists assert that all these exist, safe from Western spoliating hands, to re-appear in some more enlightened age, for which in the words of the late Swami Dayanand Sarasvati, “ the Mlechchhas (outcasts, savages, those beyond the pale of Aryan civilization) will have to wait.”

　オカルティストたちは、これらのものはすべて、西洋の略奪する手から逃れて安全に存在し、より啓蒙された時代に再び現れると主張する。そのために、故スワミ・ダヤーナンダ・サラスヴァティは、「ムレッチャ（訳注：宿なし、野蛮人、アーリア文明の圏外にいる者）は待たねばならないだろう」と述べている。

　For it is not the fault of the initiates that these documents are now “ lost ” to the profane ; nor was their policy dictated by selfishness, or any desire to monopolise the life-giving sacred lore. There were portions of the Secret Science that for incalculable ages had to remain concealed from the profane gaze. But this was because to impart to the unprepared multitude secrets of such tremendous importance, was equivalent to giving a child a lighted candle in a powder magazine.

　これらの文書が今、俗世間に「失われた」のは、イニシエートたちのせいではない。また、彼らの方針は、利己主義や、生命を与える神聖な伝承を独占したいという願望によって決定されたのでもない。「秘密の科学」の中には、数え切れないほどの長い間、俗人の視線から隠され続けなければならない部分があった。しかしそれは、そのような途方もなく重要な秘密を何の準備もしていない大勢の人々に教えることは、火薬庫の中で火をつけたろうそくを子供に与えることに等しかったからである。

　The answer to a question which has frequently arisen in the minds of students, when meeting with statements such as this, may be outlined here.

このような記述に接したとき、学徒たちがしばしば抱く疑問への答えの概略をここに記す。

　“We can understand,” they say, “ the necessity for concealing from the herd such secrets as the Vril, or the rock-destroying force, discovered by J. W. Keely, of Philadelphia, but we cannot understand how any danger could arise from the revelation of such a purely philosophic doctrine, as, e.g., the evolution of the planetary chains.”

　「フィラデルフィアのJ・W・キーリーによって発見されたヴリル（訳注：ブルワー＝リットンの『来るべき種族』に出てくる超自然的エネルギー）や岩を破壊する力のような秘密を群衆から隠す必要があることは理解できるが、例えば、惑星連鎖の進化のような純粋に哲学的な教義を明かすことによって、どうして危険が生じるのか理解できない」と人々は言う。

　The danger was this: Doctrines such as the planetary chain, or the seven races, at once give a clue to the seven-fold nature of man, for each principle is correlated to a plane, a planet, and a race; and the human principles are, on every plane, correlated to seven-fold occult forces—those of the higher planes being of tremendous power. So that any septenary division at once gives a clue to tremendous occult powers, the abuse of which would cause incalculable evil to humanity. A clue, which is, perhaps, no clue to the present generation—especially the Westerns—protected as they are by their very blindness and ignorant materialistic disbelief in the occult; but a clue which would, nevertheless, have been very real in the early centuries of the Christian era, to people fully convinced of the reality of occultism, and entering a cycle of degradation, which made them rife for abuse of occult powers and sorcery of the worst description.

　その危険性はこうであった。惑星連鎖、あるいは７つの人種といった教義は、一度に人間の７つの本質への手がかりを与える。なぜなら各原理は、階層、惑星、人種に相関しており、人間の原理はすべての階層で、７つのオカルト力（高い段階のものは途方もない力である）に相関しているのである。だから、どの７つの分類も同時に途方もないオカルト的力への手がかりを与え、その乱用は人類に計り知れない悪を引き起こすだろう。その手がかりは、今の世代、特に西洋人には、オカルトに対する盲目さと無知な唯物論的不信仰によって守られているので、おそらく手がかりにはならないだろう。しかし、キリスト教時代の初期に、オカルトの実在を確信し、堕落のサイクルに入り、オカルト的な力の乱用や最悪の呪術が横行していた人々にとっては、それでも非常にリアルな手がかりとなったはずである。

　The documents were concealed, it is true, but the knowledge itself and its actual existence had never been made a secret of by the Hierophants of the Temple, wherein Mysteries have ever been made a discipline and stimulus to virtue. This is very old news, and was repeatedly made known by the great adepts, from Pythagoras and Plato down to the Neoplatonists. It was the new religion of the Nazarenes that wrought a change for the worse—in the policy of centuries.

　文書が隠されていたのは事実だが、知識そのものとその実際の存在は、神秘が美徳への訓練と刺激にされてきた寺院の導師（司祭）たちによって秘密にされたことはない。これは非常に古いニュースで、ピタゴラスやプラトンから新プラトン主義者に至るまで、偉大なアデプトたちによって繰り返し知られてきたことである。数世紀の間に、悪い方向に変化をもたらしたのは、ナザレ人の新宗教であった。

　Moreover, there is a well-known fact, a very curious one, corroborated to the writer by a reverend gentleman attached for years to a Russian Embassy—namely, that there are several documents in the St. Petersburg Imperial Libraries to show that, even so late as during the days when Freemasonry, and Secret Societies of Mystics flourished unimpeded in Russia, i.e., at the end of the last and the beginning of the present century, more than one Russian Mystic travelled to Tibet via the Ural mountains in search of knowledge and initiation in the unknown crypts of Central Asia. And more than one returned years later, with a rich store of such information as could never have been given him anywhere in Europe. Several cases could be cited, and well-known names brought forward, but for the fact that such publicity might annoy the surviving relatives of the said late Initiates. Let any one look over the Annals and History of Freemasonry in the archives of the Russian metropolis, and he will assure himself of the fact stated.

　さらに、よく知られた事実だが非常に興味深いことを、ロシア大使館に長年駐在していた牧師が筆者に裏付けしてくれた。すなわち、サンクトペテルブルグ帝国図書館に、ロシアでフリーメーソンや神秘主義者の秘密結社が何不自由なく繁栄し、それを示すいくつかの文書があった時代、前世紀末から今世紀初頭にかけて、複数のロシア人神秘主義者が、中央アジアの未知の地下祭室に知識とイニシエーションを求めて、ウラル山脈を経由してチベットに旅した。そして何年か後に、ヨーロッパのどこへ行っても得られなかったような豊富な情報を持って戻ってきた人が何人もいた。いくつかの事例を挙げ、有名な名前を出すこともできたが、そのような公表は、亡くなったイニシエートの生存する親族を困らせるかもしれないという事実があるためできなかった。ロシアの首都の文書館にある『フリーメーソン年譜』と『フリーメーソン史』に目を通せば、誰でもこの事実を確信することだろう。

☆ここまで前半

　This is a corroboration of that which has been stated many times before, and, unfortunately, too indiscreetly. Instead of benefiting humanity, the virulent charges of deliberate invention and imposture with a purpose thrown at those who asserted but a truthful, if even a little known fact, have only generated bad Karma for the slanderers. But now the mischief is done, and truth should no longer be denied, whatever the consequences. Is it a new religion, we are asked? By no means; it is not a “religion“, nor is its philosophy “new“ ; for, as already stated, it is as old as thinking man. Its tenets are not now published for the first time, but have been cautiously given out to, and taught by, more than one European Initiate—especially by the late Ragon.

　これは、これまで何度も述べてきたことの裏付けであり、残念なことにあまりにも軽率である。人類に利益をもたらすどころか、たとえ少ししか知られていない事実であっても、真理を主張した人々に投げかけられた意図的な発明と目的のある詐欺の激しい告発は、中傷した人々に悪いカルマを生み出すだけであった。しかし、今やその災いは終わったのであり、結果がどうであれ、真理はもはや否定されるべきではない。それは新しい宗教なのか？ 決してそうではない。それは「宗教」ではなく、またその哲学も「新しい」ものではない。すでに述べたように、それは思考する人間と同じくらい古いからである。その教義は今初めて発表されたものではなく、複数のヨーロッパのイニシエート、特に故ラゴンによって注意深く伝えられ、教えられてきたものである。

　More than one great scholar has stated that there never was a religious founder, whether Aryan, Semitic or Turanian, who had “invented“ a new religion, or revealed a new truth. These founders were all “transmitters“, not original teachers. They were the authors of new forms and interpretations, while the truths upon which the latter were based were as old as mankind. Selecting one or more of those grand verities— actualities visible only to the eye of the real Sage and Seer—out of the many orally revealed to man in the beginning, preserved and perpetuated in the “adyta“ of the temples through initiation, during the MYSTERIES and by personal transmission—they revealed these truths to the masses. Thus every nation received in its turn some of the said truths, under the veil of its own local and special symbolism ; which, as time went on, developed into a more or less philosophical cultus, a Pantheon in mythical disguise. Therefore is Confucius, a very ancient legislator in historical chronology, though a very modern Sage in the World’s History, shown by Dr. Legge\*—who calls him “ emphatically “a transmitter”, not a maker”—as saying: “I only hand on: I cannot create new things. I believe in the ancients and therefore I love them.”† (Quoted in “Science of Religions” by Max Müller.)

\* Lün-Yü (§ 1 a) Schott. “ Chinesische Literatur,” p. 7.

† “Life of Confucius,” p. 96.

　アーリア人であれ、セム人であれ、トゥラン人であれ、新しい宗教を「発明」し、新しい真理を明らかにした宗教の創始者は一人もいなかったと、複数の偉大な学者が述べている。これらの創始者はすべて「伝達者」であり、オリジナルの師ではなかった。彼らは新しい形式と解釈の著者であり、後者の基礎となる真理は人類と同じくらい古いものであった。彼らは、最初に口頭で人に示され、イニシエーションを経て寺院の「奥の院」の中に保存され、永続している多くの真理の中から、真の賢者や予言者の目にのみ見える真理を一つ以上選び、秘儀伝授と個人的伝達によって大衆にこれらの真理を明らかにしたのである。こうして、どの国も、その地方の特別な象徴のベールの下で順次、前述の真理の一部を受け取っていった。それゆえ、孔子は歴史的な年表では非常に古い立法者であるが、世界史の中では非常に近代的な賢人であり、レッグ博士\*（訳注：ジェームズ・レッグ）は彼を「製作者ではなく発信者である」と強調し、こう言っている。「私はただ伝えるだけで、新しいものを作り出すことはできない。私は古代人を信じており、それゆえ彼らを愛している」†（マックス・ミュラー著 “Science of Religions” by Max Müller“より引用）。

\* Lün-Yü (§ 1 a) Schott. “ Chinesische Literatur,” （『中国文学』）p. 7.

† “ Life of Confucius,” （『孔子の生涯』）p. 96.

　The writer loves them too, and therefore believes in the ancients, and the modern heirs to their Wisdom. And believing in both, she now transmits that which she has received and learnt herself to all those who will accept it. As to those who may reject her testimony,—i.e., the great majority—she will bear them no malice, for they will be as right in their way in denying, as she is right in hers in affirming, since they look at truth from two entirely different stand-points. Agreeably with the rules of critical scholarship, the Orientalist has to reject “a priori“ whatever evidence he cannot fully verify for himself. And how can a Western scholar accept on hearsay that which he knows nothing about? Indeed, that which is given in these volumes is selected from oral, as much as from written teachings. This first instalment of the esoteric doctrines is based upon Stanzas, which are the records of a people unknown to ethnology ; it is claimed that they are written in a tongue absent from the nomenclature of languages and dialects with which philology is acquainted; they are said to emanate from a source (Occultism) repudiated by science; and, finally, they are offered through an agency, incessantly discredited before the world by all those who hate unwelcome truths, or have some special hobby of their own to defend. Therefore, the rejection of these teachings may be expected, and must be accepted beforehand. No one styling himself a “ scholar,” in whatever department of exact science, will be permitted to regard these teachings seriously. They will be derided and rejected “a priori“ in this century ; but only in this one. For in the twentieth century of our era scholars will begin to recognize that the “Secret Doctrine“ has neither been invented nor exaggerated, but, on the contrary, simply outlined ; and finally, that its teachings antedate the Vedas.‡ Have not the latter been derided, rejected, and called “ a modern forgery ” even so recently as fifty years ago ? Was not Sanskrit proclaimed at one time the progeny of, and a dialect derived from, the Greek, according to Lemprière and other scholars? About 1820, Prof. Max Müller tells us, the sacred books of the Brahmans, of the Magians, and of the Buddhists, “ were all but unknown, their very existence was doubted, and there was not a single scholar who could have translated a line of the Veda . . . of the Zend Avesta, or . . . of the Buddhist Tripitaka, and now the Vedas are proved to be the work of the highest antiquity whose ‘ preservation amounts almost to a marvel’ (Lecture on the Vedas).

‡ This is no pretension to prophecy, but simply a statement based on the knowledge

of facts. Every century an attempt is being made to show the world that Occultism is no vain superstition. Once the door permitted to be kept a little ajar, it will be opened wider with every new century. The times are ripe for a more serious know- ledge than hitherto permitted, though still very limited, so far.

　著者もまた古代人を愛しており、それゆえに古代人と、古代人の智慧を受け継ぐ現代人を信じている。そしてその両方を信じて、著者は今、自ら受け、学んだことを、それを受け入れてくれるすべての人々に伝えている。著者は自分の証言を拒否する可能性のある人々、すなわち大多数の人々に対して悪意を抱くことはない。なぜなら、人々が否定することはその人たちのやり方として正しいし、著者が肯定することは著者のやり方として正しいからである。批判的学問のルールに従って、東洋学者が自分自身で十分に検証できない証拠は「先験的」に拒否しなければならないのである。そして、西洋の学者は、自分が何も知らないことを伝聞で受け入れることができるだろうか。実際、この本で紹介されているのは、文字で書かれた教えと同様に、口伝のものからも選ばれている。この秘教的教義の最初の部分はスタンザに基づいている。スタンザは民族学上未知の人々の記録であり、言語学が知っている言語や方言の命名法にはない独特の言葉で書かれていると主張され、科学が否定する情報源（オカルティズム）から発せられたと言われており、最後に、歓迎できない真実を嫌う人々、あるいは自分の特別な趣味を守る人々によって絶え間なく世界中で信用されていない機関を通じて提供されているのである。したがって、これらの教えが否定されることは予想されることであり、あらかじめ受け入れておかなければならない。精密科学のどの部門であれ、「学者」を自称する者は、これらの教えを真剣に考慮することは許されないだろう。学者は今世紀中「先験的」に嘲笑し、拒絶するだろう。しかし今世紀に限っては、である。20世紀には、「シークレット・ドクトリン」が捏造されたものでも誇張されたものでもなく、それどころか、単純に概説されていること、そして、その教えがヴェーダよりも古いことを、学者が認識し始めるだろうからだ。‡ 後者は50年前にも嘲笑され、否定され、「現代の偽造」と呼ばれたことがあったのではないか？ サンスクリット語は、ランプリエール（訳注：英国の古典学者、辞書編集者、神学者、教師、校長。1765-1824）や他の学者によれば、ギリシャ語の子孫であり、ギリシャ語から派生した方言であるとされたこともあったのではかったか？ マックス・ミュラー教授によれば、1820年頃、バラモン、魔術師、仏教徒の聖典は「ほとんど知られておらず、その存在自体が疑われており、ヴェーダを一行でも翻訳できる学者は一人もいなかった。…… ゼンドアヴェスター、 仏教の三蔵(経蔵・律蔵・論蔵）は。そして今、ヴェーダは最高の古代の書物であり、その保存状態はほとんど驚異に等しいことが証明された」と言う（Lecture on the Vedas「ヴェーダ講義」）。

‡これは予言めいたものではなく、単に事実の知識に基づいた発言である。世紀ごとに、オカルティズムが虚しい迷信ではないことを世界に示そうとする試みがなされている。いったん扉が少し開いていることが許されれば、新しい世紀が来るたびに、その扉はより大きく開かれることになるだろう。今のところまだ非常に限られてはいるが、これまで許されてきたよりももっと本格的な知識を得るために、時代は熟しているのである。

　The same will be said of the Secret Archaic Doctrine, when proofs are given of its undeniable existence and records. But it will take centuries before much more is given from it. Speaking of the keys to the Zodiacal mysteries as being almost lost to the world, it was remarked by the writer in “ Isis Unveiled ” some ten years ago that : “ The said key must be turned ‘seven‘ times before the whole system is divulged. We will give it but ‘one‘ turn, and thereby allow the profane one glimpse into the mystery. Happy he, who understands the whole ! ”

　「秘められた古代の教義」についても、その紛れもない存在と記録についての証明がなされれば、同じことが言えるだろう。しかし、そこからさらに多くのことが語られるには何世紀もかかるだろう。黄道十二宮の謎の鍵がほとんど失われていることについて、10年ほど前、『イシス・アンヴェイルド』の著者は次のように述べている。「この鍵は、体系全体が明らかにされるまでに7回回さなければならない。我々はそれを〈1回〉だけ回し、それによって俗人が謎を垣間見られるようにする。全てを理解する者は幸せである」。

　The same may be said of the whole Esoteric system. One turn of the key, and no more, was given in “ Isis.” Much more is explained in these volumes. In those days the writer hardly knew the language in which the work was written, and the disclosure of many things, freely spoken about now, was forbidden. In Century the Twentieth some disciple more informed, and far better fitted, may be sent by the Masters of Wisdom to give final and irrefutable proofs that there exists a Science called Gupta-Vidya; and that, like the once-mysterious sources of the Nile, the source of all religions and philosophies now known to the world has been for many ages forgotten and lost to men, but is at last found.

　同じことが、秘教の体系全体に言えるかもしれない。『イシス』では鍵を一回転させただけで、それ以上のことは説明されていない。これらの本では、さらに多くのことが説明されている。当時、著者は著作が書かれた言語をほとんど知らず、今では自由に語られている多くの事柄の開示が禁じられていた。20世紀には、より多くの知識を持ち、はるかに適した弟子が智慧のマスターたちによって送られ、グプタ・ヴィディヤという科学が存在すること、そしてかつて謎だったナイルの水源のように、現在世界に知られているすべての宗教と哲学の源は、長い間忘れられ人々に失われていたが、ついに見つかったことを最終的に証明するかもしれない。

　Such a work as this has to be introduced with no simple Preface, but with a volume rather ; one that would give facts, not mere disquisitions, since the Secret Doctrine is not a treatise, or a series of vague theories, but contains all that can be given out to the world in this century.

　このような著作は、単なる序文ではなくむしろ一冊の本で紹介されなければならない。なぜなら、『シークレット・ドクトリン』は論説や漠然とした理論の積み重ねではなく、今世紀中に世界に発信できるすべてのものを含んでいる、事実を伝えるものだからである。

　It would be worse than useless to publish in these pages even those portions of the esoteric teachings that have now escaped from confinement, unless the genuineness and authenticity—at any rate, the probability—of the existence of such teachings was first established. Such statements as will now be made, have to be shown warranted by various authorities: those of ancient philosophers, classics and even certain learned Church Fathers, some of whom knew these doctrines because they had studied them, had seen and read works written upon them; and some of whom had even been personally initiated into the ancient Mysteries, during the performance of which the arcane doctrines were allegorically enacted. The writer will have to give historical and trustworthy names, and to cite well-known authors, ancient and modern, of recognized ability, good judgment, and truthfulness, as also to name some of the famous proficients in the secret arts and science, along with the mysteries of the latter, as they are divulged, or, rather, partially presented before the public in their strange archaic form.

　このページで、現在、幽閉から逃れてきた秘教の一部を公開することは、そのような教えの存在の真正性と信憑性、とにかくその可能性が、最初に確立されない限り、全く無益である。その中には、これらの教義を研究し、それについて書かれた著作を見たり読んだりしてこれらの教義を知っていた者もいれば、古代の秘儀に自ら入門し（自らイニシエーションを受け）、秘儀の実演中にこれらの教義が寓意的に演じられていた者もいる。筆者は歴史的で信頼できる名前を挙げ、古今東西の、能力、判断力、真実性が認められた有名な著者を引用しなければならない。また、秘術と科学の有名な熟練者の名前を、後者の神秘とともに、公開されている、あるいはむしろ奇妙な古代の形で公衆の前に部分的に提示されている、それらの名前を挙げる必要がある。

　How is this to be done? What is the best way for achieving such an object ? was the ever-recurring question. To make our plan clearer, an illustration may be attempted. When a tourist coming from a well- explored country, suddenly reaches the borderland of a terra incognita, hedged in, and shut out from view by a formidable barrier of im- passable rocks, he may still refuse to acknowledge himself baffled in his exploratory plans. Ingress beyond is forbidden. But, if he cannot visit the mysterious region personally, he may still find a means of examining it from as short a distance as can be arrived at. Helped by his knowledge of landscapes left behind him, he can get a general and pretty correct idea of the transmural view, if he will only climb to the loftiest summit of the altitudes in front of him. Once there, he can gaze at it, at his leisure, comparing that which he dimly perceives with that which he has just left below, now that he is, thanks to his efforts, beyond the line of the mists and the cloudcapped cliffs.

　これはどうしたら実現できるのか？このような目的を達成するための最良の方法は何だろう？ というのが、常に繰り返される疑問であった。私たちの計画をより明確にするために、図解を試みることができる。よく探索された国から来た旅行者が、突然、未知の領域の境界線に到達したとき、垣根で囲まれ、通行不可能な岩の手ごわい障壁によって視界から閉ざされても、彼は探索計画が妨げられることを認めようとしないかもしれない。その先に行くことは禁じられている。しかし、個人的にその神秘的な地域を訪れることができなくても、できるだけ近い距離から調査する方法を見つけることができるかもしれない。目の前にある最も高い山頂に登りさえすれば、背後に残された風景に関する知識に助けられ、横断的な眺めの大まかでかなり正しい考えを持つことができる。そこで、自分の努力のおかげで霧と雲に覆われた崖の境界線を越えた今、ぼんやりと見えているものを、下に残してきたものと比較しながら、気の向くままに眺めることができるのだ。

　Such a point of preliminary observation, for those who would like to get a more correct understanding of the mysteries of the pre- archaic periods given in the texts, cannot be offered to them in these two volumes. But if the reader has patience, and would glance at the present state of beliefs and creeds in Europe, compare and check it with what is known to history of the ages directly preceding and following the Christian era, then he will find all this in Volume III. of this work.

　このような予備的な観察のポイントは、テキストに示されている古代の前の時代の神秘をより正しく理解したい人のためには、この２巻では提供できない。しかし、もし読者が忍耐強く、ヨーロッパにおける信仰と信条の現状に目を向け、キリスト教時代の直前と直後の時代の歴史に知られていることと比較し確認するのであれば、この著作の第３巻にこれらすべてを見出すことができるだろう。

　In that volume a brief recapitulation will be made of all the principal adepts known to history, and the downfall of the mysteries will be described; after which began the disappearance and final and systematic elimination from the memory of men of the real nature of initiation and the Sacred Science. From that time its teachings became Occult, and Magic sailed but too often under the venerable but frequently misleading name of Hermetic philosophy. As real Occultism had been prevalent among the Mystics during the centuries that preceded our era, so Magic, or rather Sorcery, with its Occult Arts, followed the beginning of Christianity.

　その巻では、歴史に知られているすべての主要なアデプトたちの簡単な要約が作成され、神秘の没落が説明されるだろう。その没落の後、イニシエーションと聖なる科学の本当の性質が人々の記憶から消え、最終的かつ組織的に排除されるようになったのだった。その時から、その教えはオカルト（秘められた教え）となり、魔術はヘルメス哲学という由緒ある、しかししばしば誤解を招く名称のもとに航海するようになった。私たちの時代に先立つ数世紀の間、神秘主義者の間で本物のオカルトが広まっていたように、魔法、いや魔術は、そのオカルト技術とともに、キリスト教の始まりに同行したのである。

　However great and zealous the fanatical efforts, during those early centuries, to obliterate every trace of the mental and intellectual labour of the Pagans, it was a failure; but the same spirit of the dark demon of bigotry and intolerance has perverted systematically and ever since, every bright page written in the pre-Christian periods. Even in her uncertain records, history has preserved enough of that which has survived to throw an impartial light upon the whole. Let, then, the reader tarry a little while with the writer, on the spot of observation selected. He is asked to give all his attention to that millennium which divided the pre- Christian and the post-Christian periods, by the year One of the Nativity. This event—whether historically correct or not—has nevertheless been made to serve as a first signal for the erection of manifold bulwarks against any possible return of, or even a glimpse into, the hated religions of the Past ; hated and “dreaded”—because throwing such a vivid light on the new and intentionally veiled interpretation of what is now known as the “New Dispensation.”

　初期の数世紀、異教徒の精神的・知的労働の痕跡をすべて消し去ろうとする狂信的な努力がいかに偉大で熱心であったとしても、それは失敗だったのである。しかし、偏見と不寛容という暗黒の悪魔の同じ精神が、キリスト教以前の時代に書かれたすべての輝かしいページを、それ以来、体系的に変質させてきたのである。不確かな記録であっても、歴史は全体を公平に照らし出すのに十分なものを保存している。そこで、読者は筆者と一緒に、選んだ観察場所にしばらく滞在してみよう。読者は、キリスト教以前の時代とキリスト教以後の時代を、キリスト降誕の年である1年によって分けたその千年紀に、全神経を集中させるように求められている。この出来事は、歴史的に正しいかどうかは別として、過去の嫌われ者の宗教が復活したり、あるいは垣間見たりする可能性に対して、さまざまな防波堤を築くための最初の信号として機能するように作られている。嫌われている「恐るべき」もの、それは、現在「新しい摂理」として知られていることの新たな、意図的にベールを被った解釈に鮮やかな光を投げかけるからなのである。

　However superhuman the efforts of the early Christian fathers to obliterate the Secret Doctrine from the very memory of man, they all failed. Truth can never be killed; hence the failure to sweep away entirely from the face of the earth every vestige of that ancient Wisdom, and to shackle and gag every witness who testified to it. Let one only think of the thousands, and perhaps millions, of MSS. burnt ; of monu- ments, with their too indiscreet inscriptions and pictorial symbols, pulve- rised to dust ; of the bands of early hermits and ascetics roaming about among the ruined cities of Upper and Lower Egypt, in desert and mountain, valleys and highlands, seeking for and eager to destroy every obelisk and pillar, scroll or parchment they could lay their hands on, if it only bore the symbol of the tau, or any other sign borrowed and appro- priated by the new faith ; and he will then see plainly how it is that so little has remained of the records of the Past. Verily, the fiendish spirits of fanaticism, of early and mediæval Christianity and of Islam, have from the first loved to dwell in darkness and ignorance ; and both have made

　“ ———— the sun like blood, the earth a tomb, The tomb a hell, and hell itself a murkier gloom ! ”

　初期のキリスト教の教父たちが、人間の記憶から秘密の教義を消し去ろうと、いかに超人的な努力を払ったとしても、それらはすべて失敗に終わった。真理は決して殺すことができない。それゆえ、古代の智慧の痕跡を地球の表面から完全に一掃し、それを証言するすべての証人に手錠をかけ、口封じをすることに失敗したのである。何千、いや何百万もの古文書が燃やされ、何百万もの遺跡が破壊されたことを思えばわかるだろう。そのため、このようなことが起こったのである。初期の隠者や修行者の一団が、砂漠や山、谷や高地など、上エジプトや下エジプトの廃墟となった都市を歩き回り、手に入る限りのオベリスクや柱、巻物や羊皮紙を、それがタウのシンボルや、他の新しい信仰から借用し承認されたシンボルを持つだけなら、破壊しようと躍起になって探したこと、その時に、どうして過去の記録がほとんど残っていなかったかが明確に分かるだろう。本当に、初期および中世のキリスト教とイスラム教の狂信的な精神は、最初から暗闇と無知の中に住むことを好んだのだ。そして両者は、

　「太陽を血のようにし、大地を墓のようにし、墓は地獄のようにし、地獄そのものはより暗い暗黒のようにした！」。

　Both creeds have won their proselytes at the point of the sword; both have built their churches on heaven-kissing hecatombs of human victims. Over the gateway of Century I. of our era, the ominous words “ the Karma of Israel,” fatally glowed. Over the portals of our own, the future seer may discern other words, that will point to the Karma for cunningly made-up History, for events purposely perverted, and for great characters slandered by posterity, mangled out of recognition, between the two cars of Jagannâtha—Bigotry and Materialism; one accepting too much, the other denying all. Wise is he who holds to the golden mid-point, who believes in the eternal justice of things. Says Faigi Diwan, the “ witness to the wonderful speeches of a free-thinker who belongs to a thousand sects ” : “ In the assembly of the day of resurrection, when past things shall be forgiven, the sins of the Ka’bah will be forgiven for the sake of the dust of Christian churches.” To this, Professor Max Müller replies : “ The sins of Islam are as worthless as the dust of Christianity. On the day of resurrection both Muhammadans and Christians will see the vanity of their religious doctrines. Men fight about religion on earth ; in heaven they shall find out that there is only one true religion—the worship of God’s Spirit.”\*

\* “ Lectures on the Science of Religion,” by F. Max Müller, p. 257.

　どちらの信条も剣を突きつけて信者を獲得し、犠牲となった人間の天国のキスをする生贄（大虐殺 hecatombs）の上に教会を建てたのである。我々の時代の第一世紀の門には、「イスラエルの業」という不吉な言葉が致命的に光っていた。それは、狡猾にでっち上げられた歴史、意図的に曲げられた出来事、後世に中傷され、認識できなくされた偉大な人物のカルマを、ジャガンタの二つの車である偏屈と唯物論の間で指し示すかもしれない。 賢明なのは、黄金の中点を守り、物事の永遠の正義を信じる者である。 千の宗派に属する自由思想家の素晴らしい演説の証人」であるファイギ・ディワンは言う：「過去のものが赦される復活の日の集まりでは、キリスト教会の塵のためにカーバの罪が赦されるだろう」。 これに対して、マックス・ミュラー教授は、「イスラムの罪は、キリスト教の塵と同じくらい価値がない」と答えている。 復活の日、ムハンマドもキリスト教徒も、自分たちの宗教的教義の虚しさを知ることになる。 人は地上で宗教について争うが、天国で真の宗教はただ一つ、神の霊の崇拝であることを知るだろう」\*。

\* “ Lectures on the Science of Religion,” by F. Max Müller, p. 257.

　In other words—“There is no religion (or law) higher than truth”—“SATYÂT NÂSTI PARO DHARMAH”—the motto of the Maharajah of Benares, adopted by the Theosophical Society.

　すなわち、「真理より高い（まさる）宗教（または法則）はない」“Satyan nasti paro dharmah“ （訳注）ということで、これはベナレスのマハラジャの標語であり、神智学協会が採用したものである。

（訳注）サンスクリット語の原文は、Satyan nasti paro dharmah で、「真理より偉大なものはない」とも訳され得る。 最初の3つの単語は直訳すると、satyanは「真実より」、nastiは「〜ない」、paroは「もっと、より、高い」である。ダルマは多くのことを意味するので、翻訳するのは難しい。 その根本的な意味は、「確立されたもの、確固たるもの」である。 その基本的な根源的な意味から、「法則」「慣習」「義務」「道徳」「正義」「宗教」「教えや教義」「良い行い」「本質」といった他の意味も持つ。（神智学協会）

　As already said in the Preface, the Secret Doctrine is not a version of “ Isis Unveiled ”—as originally intended. It is a volume explanatory of it rather, and, though entirely independent of the earlier work, an indispensable corollary to it. Much of what was in Isis could hardly be understood by theosophists in those days. The Secret Doctrine will now throw light on many a problem left unsolved in the first work, especially on the opening pages, which have never been under- stood.

　前書きですでに述べたように『シークレット・ドクトリン』は、もともと意図されていたような『イシス・アンヴェールド』の別版ではない。むしろそれを説明するものであり、先の著作とは完全に独立しているものの、欠くことのできない副次的なものである。『イシス』に書かれていることの多くが、当時の神智学徒にはほとんど理解することができなかった。『シークレット・ドクトリン』は、最初の著作で未解決のまま残された多くの問題、特にこれまで理解されてこなかった冒頭のページに光を当てるだろう。

　Concerned simply with the philosophies within our historical times and the respective symbolism of the fallen nations, only a hurried glance could be thrown at the panorama of Occultism in the two volumes of Isis. In the present work, detailed Cosmogony and the evolution of the four races that preceded our Fifth race Humanity are given, and now two large volumes explain that which was stated on the first page of Isis Unveiled alone, and in a few allusions scattered hither and thither throughout that work. Nor could the vast catalogue of the Archaic Sciences be attempted in the present volumes, before we have disposed of such tremendous problems as Cosmic and Planetary Evolution, and the gradual development of the mysterious Humanities and races that preceded our “ Adamic ” Humanity. Therefore, the present attempt to elucidate some mysteries of the Esoteric philosophy has, in truth, nothing to do with the earlier work. As an instance, the writer must be allowed to illustrate what is said.

　単に私たちの歴史的時代における哲学と、滅びた国々のそれぞれの象徴に関心があるだけでは、『イシス』２巻のオカルティズムのパノラマを急いで一瞥することしかできないだろう。この著作（シークレット・ドクトリン）では、詳細な宇宙論と、我々の第５人種である人類に先立つ４つの人種の進化が述べられており、『イシス・アンヴェールド』の最初のページだけに述べられていたこと、そしてその著作のあちこちに散りばめられているいくつかの引用で述べられていたことが、今や２つの大きな巻で説明されているのである。また、宇宙と惑星の進化や、私たち「アダムの」人類に先立つ神秘的な人類と種族の漸進的進化といった途方もない課題を解決しない限り、古代の科学の膨大な目録を現在の本で試みることは不可能であった。したがって、秘教哲学の謎を解明する今回の試みは、実のところ、それ以前の著作とは何の関係もない。その一例として、筆者が述べていることを説明することが許されなければならない。

　Volume I. of “ Isis ” begins with a reference to “ an old book ”—

　『イシス』の第1巻は、「ある古い書物」への言及から始まり、次のように述べる。

　“So very old that our modern antiquarians might ponder over its pages an indefinite time, and still not quite agree as to the nature of the fabric upon which it is written. It is the only original copy now in existence. The most ancient Hebrew document on occult learning—the Siphrah Dzeniouta—was com- piled from it, and that at a time when the former was already considered in the light of a literary relic. One of its illustrations represents the Divine Essence emanating from Adam\* like a luminous arc proceeding to form a circle ; and then, having attained the highest point of its circumference, the ineffable glory bends back again, and returns to earth, bringing a higher type of humanity in its vortex. As it approaches nearer and nearer to our planet, the Emanation becomes more and more shadowy, until upon touching the ground it is as black as night.”

\*The name is used in the sense of the Greek word ἄνθρωπος.

　「非常に古いものなので、現代の古文書研究家がそのページを読み返すと、それが書かれている布の性質について、まだ全く同意できないかもしれない。現存する唯一の原本である。ヘブライ語の最も古いオカルト学習の文書である『シフラー・デゼニウタ』（Siphrah Dzeniouta）は、この文書から編纂されたもので、この文書がすでに文学的遺物とみなされていた時代に作られたものである。その挿絵の一つに、アダム(\*）から発せられた神の本質が、光り輝く弧のように円を描いて進み、その円周の最高点に達した後、言いようのない栄光が再び屈曲して地上に戻り、その渦に人類のより高い型を巻き込むというものがある。地球へ近づくにつれ発散はますます影を濃くし、地上に降り立つと夜のように黒くなる」。

\* ギリシャ語の 「人」の意味で使われている。

　The “ very old Book ” is the original work from which the many volumes of Kiu-ti were compiled. Not only this latter and the Siphrah Dzeniouta but even the Sepher Jezirah,\* the work attributed by the Hebrew Kabalists to their Patriarch Abraham (!), the book of Shu-king, China’s primitive Bible, the sacred volumes of the Egyptian Thoth- Hermes, the Purânas in India, and the Chaldean Book of Numbers and the Pentateuch itself, are all derived from that one small parent volume. Tradition says, that it was taken down in Senzar, the secret sacerdotal tongue, from the words of the Divine Beings, who dictated it to the sons of Light, in Central Asia, at the very beginning of the 5th (our) race; for there was a time when its language (the Sen-zar) was known to the Initiates of every nation, when the forefathers of the Toltec understood it as easily as the inhabitants of the lost Atlantis, who inherited it, in their turn, from the sages of the 3rd Race, the Manushis, who learnt it direct from the Devas of the 2nd and 1st Races. The “ illustration ” spoken of in “ Isis ” relates to the evolution of these Races and of our 4th and 5th Race Humanity in the Vaivasvata Manvantara or “ Round ; ” each Round being composed of the Yugas of the seven periods of Humanity; four of which are now passed in our life cycle, the middle point of the 5th being nearly reached. The illustration is symbolical, as every one can well understand, and covers the ground from the beginning. The old book, having described Cosmic Evolution and ex- plained the origin of everything on earth, including physical man, after giving the true history of the races from the First down to the Fifth (our) race, goes no further. It stops short at the beginning of the Kali Yuga just 4989 years ago at the death of Krishna, the bright “ Sun-god,” the once living hero and reformer.\*

\*Rabbi Jehoshua Ben Chananea, who died about A.D. 72, openly declared that he had performed “ miracles ” by means of the Book of Sepher Jezireh, and challenged every sceptic. Franck, quoting from the Babylonian Talmud, names two other thau- maturgists, Rabbis Chanina and Oshoi. (See “ Jerusalem Talmud, Sanhedrin,” c. 7, etc. ; and “ Franck,” pp. 55, 56.) Many of the Mediæval Occultists, Alchemists, and Kabalists claimed the same ; and even the late modern Magus, Eliphas Lévi, publicly asserts it in print in his books on Magic.

　この「非常に古い書物」は、『キウ・ティ』の多くの巻が編集された原著である。この後者や”Siphrah Dzeniouta”だけでなく、ヘブライ語のカバリストが祖先アブラハム（！）のものとした『セフィール・イエツィラー』＊、『書経』の書、中国の原始聖典、エジプトのトート（ヘルメス）の聖典、インドの『プラーナ』、カルデアの『民数記』、『五書』自体も、すべてこの小さな１冊から派生しているのである。伝統によれば、この書物は、第５人種（私たち）のまさに初期に、中央アジアで光の子たちに口述した神聖な存在の言葉から、秘密の聖職者の言葉であるセンザル語で書き留められたという。トルテカの祖先は、失われたアトランティスの住人のように簡単にそれを理解した。彼らは、第２人種と第１人種のデーヴァ（神々）から直接学んだ第３人種の賢者、マヌシたちから順番にそれを受け継いだのだ。『イシス』で語られている「図説」は、ヴァイヴァスヴァタ・マンヴァンタラつまり「ラウンド」におけるこれらの人種と第４、第５人種の人類の進化に関するもので、それぞれのラウンドは人類の７つの期間のユガで構成されており、現在そのうちの４つが私たちの生命周期で過ぎ、第５人種の中間点にほぼ到達している。この図解は、誰もがよく理解できるように象徴的なものであり、最初からこの分野を網羅している。この古い書物は、宇宙進化を説明し、第１人種から第５人種（私たち）までの本当の歴史を述べた後、肉体の人間を含む地球上のすべてのものの起源を説明しているが、それ以上踏み込んでいない。そして、ちょうど4989年前のカリユガの始まりで、かつて生きた英雄であり改革者であった輝く「太陽神」クリシュナの死で止まっているのである\*。

＊西暦72年頃に亡くなったラビ・ジェホシュア・ベン・チャナネアは、『セフィール・イエツィラー』の書によって「奇跡」を起こしたと公言し、あらゆる懐疑論者に異議を唱えた。フランクは『バビロニア・タルムード』から引用して、ラビ・チャニナとオショイという２人のソーマトゥルギストの名前を挙げている（『エルサレム・タルムード』の「サンヘドリン」c. 7など、および “Franck”55、56 ページを参照）。中世のオカルティスト、錬金術師、カバリストの多くも同じことを主張し、近代の魔術師エリファス・レヴィでさえ、魔術に関する著書の中でそれを公然と主張している。

　But there exists another book. None of its possessors regard it as very ancient, as it was born with, and is only as old as the Black Age, namely, about 5,000 years. In about nine years hence, the first cycle of the first five millenniums, that began with the great cycle of the Kali- Yuga, will end. And then the last prophecy contained in that book (the first volume of the prophetic record for the Black Age) will be accomplished. We have not long to wait, and many of us will witness the Dawn of the New Cycle, at the end of which not a few accounts will be settled and squared between the races. Volume II. of the Prophecies is nearly ready, having been in preparation since the time of Buddha’s grand successor, Sankarâchârya.

　しかし、もう一つ別の本が存在する。その所有者は誰もそれを非常に古いものとは考えていない。それは黒の時代と共に生まれ、黒い時代と同じ年齢つまり約5000年前くらいしか経っていないからである。これから約9年で、カリユガの大周期から始まった最初の5千年のサイクルが終わる。そして、あの本（黒の時代の予言記録の第一巻）に含まれる最後の予言が達成されるのである。私たちの多くは、新しいサイクルの夜明けを目撃することになるだろう。予言の第二巻は、ブッダの大いなる後継者であるシャンカラチャリヤの時代から準備が進められてきて、ほぼ準備ができている。

　One more important point must be noticed, one that stands foremost in the series of proofs given of the existence of one primeval, universal Wisdom—at any rate for the Christian Kabalists and students. The teachings were, at least, partially known to severa of the Fathers of the Church. It is maintained, on purely historical grounds, that Origen, Synesius, and even Clemens Alexandrinus, had been themselves initiated into the mysteries before adding to the Neo-Platonism of the Alexan- drian school, that of the Gnostics, under the Christian veil. More than this, some of the doctrines of the Secret schools—though by no means all—were preserved in the Vatican, and have since become part and parcel of the mysteries, in the shape of disfigured additions made to the original Christian programme by the Latin Church. Such is the now materialised dogma of the Immaculate Conception. This accounts for the great persecutions set on foot by the Roman Catholic Church against Occultism, Masonry, and heterodox mysticism generally.

　もう一つの重要な点は、一つの太古の普遍的な智慧の存在を示す一連の証明の中で最も重要な点で、少なくともキリスト教のカバリストと学徒にとってはそれが重要なものであることに注意しなければならない。その教えは、少なくとも、教会の数人の教父に部分的に知られていた。純粋に歴史的な根拠として、オリゲネス、シネシウス、さらにクレメンス・アレクサンドリヌスは、アレクサンドリア学派の新プラトン主義、グノーシス派のそれ（新プラトン主義）をキリスト教のベールの下に加える前に、自ら秘儀に入信していたと主張されている。さらに、秘教学派の教義のいくつかは、決してすべてではないが、バチカンに保存され、その後ラテン教会によって本来のキリスト教のプログラムに加えられた醜い追加という形で、秘儀の一部となったのである。無原罪の御宿り（懐胎）のドグマがそれである。このことは、ローマ・カトリック教会がオカルティズム、フリーメーソン、異端の神秘主義全般に対して行っている大迫害を説明するものである。

　The days of Constantine were the last turning-point in history, the period of the Supreme struggle that ended in the Western world throttling the old religions in favour of the new one, built on their bodies. From thence the vista into the far distant Past, beyond the “ Deluge ” and the Garden of Eden, began to be forcibly and relentlessly closed by every fair and unfair means against the indiscreet gaze of posterity. Every issue was blocked up, every record that hands could be laid upon, destroyed. Yet there remains enough, even among such mutilated records, to warrant us in saying that there is in them every possible evidence of the actual existence of a Parent Doctrine. Fragments have survived geological and political cataclysms to tell the story ; and every survival shows evidence that the now Secret Wisdom was once the one fountain head, the ever-flowing perennial source, at which were fed all its streamlets—the later religions of all nations—from the first down to the last. This period, beginning with Buddha and Pythagoras at the one end and the Neo-Platonists and Gnostics at the other, is the only focus left in History wherein converge for the last time the bright rays of light streaming from the æons of time gone by, unobscured by the hand of bigotry and fanaticism.

　コンスタンティノスの時代は、歴史の最後の転換点であり、西洋世界が古い宗教を打ち砕き、その上に築かれた新しい宗教を支持することになった至高の闘いの時代であった。そこから、「大洪水」と「エデンの園」を越えた遠い過去への展望が、後世の人々の軽率な視線に対して、あらゆる公平・不公平な手段で強制的かつ執拗に閉ざされはじめた。あらゆる問題が封鎖され、手が届く限りのあらゆる記録が破壊された。しかし、そのような破壊された記録の中にも、親教理が実際に存在したことを示すあらゆる証拠があると言えるだけのものが残されているのである。それらの断片は、地質学的、政治的激変を生き延びて、その物語を語っている。そして、すべての残存物は、今や秘密の智慧がかつて唯一の源泉、常に流れ続ける永遠の源であり、そのすべての流れは最初のものから最後のものまで、あらゆる国の後の宗教に供給されていたという証拠を示している。ブッダとピタゴラスに始まり、新プラトン主義者とグノーシス主義者に至るこの時代は、偏見と狂信の手によって遮られることなく、過ぎ去った時間の永劫（アイオーン）から流れ出る明るい光線が最後に収束する、歴史上唯一の焦点となるのである。

　This accounts for the necessity under which the writer has laboured to be ever explaining the facts given from the hoariest Past by evidence gathered from the historical period. No other means was at hand, at the risk even of being once more charged with a lack of method and system. The public must be made acquainted with the efforts of many World-adepts, of initiated poets, writers, and classics of every age, to preserve in the records of Humanity the Knowledge of the existence, at least, of such a philosophy, if not actually of its tenets. The Initiates of 1888 would indeed remain incomprehensible and ever a seemingly impossible myth, were not like Initiates shown to have lived in every other age of history. This could be done only by naming Chapter and Verse where may be found mention of these great characters, who were preceded and followed by a long and interminable line of other famous Antediluvian and Postdiluvian Masters in the arts. Thus only could be shown, on semi-traditional and semi-historical authority, that knowledge of the Occult and the powers it confers on man, are not altogether fictions, but that they are as old as the world itself.

　このため著者は、最も古い過去から与えられた事実を、歴史上の時代から収集した証拠によって常に説明することに苦心してきたのである。他の手段がなかったので、方法と体系の欠如で再び非難される危険を冒してまで、そうしてきた。実際にその教義を知らないとしても、少なくとも世界の多くのアデプトたち、あらゆる時代のイニシエーションを受けた詩人、著者、古典作家が、人類の記録に、そのような哲学が存在したという知識を残すために努力したことを、一般の人々は知らなければならない。1888年のイニシエートたちは、歴史の他のすべての時代に生きていたことが示されているイニシエートたちと同じでなかったら、確かに理解できないまま、永遠に一見あり得ないように思われる神話であり続けただろう。そのためには、これらの偉大な人物に先立つ、またそれに続く、長く果てしない数の有名な先史時代と後史時代のアート（人文科学）のマスターたちの言及がある章と節を挙げるしかない。こうして、半伝統的かつ半歴史的な権威に基づいて、オカルトの知識とそれが人に与える力がまったくの虚構ではなく、世界そのものと同じくらい古いものであることを示すことができたのである。

　To my judges, past and future, therefore—whether they are serious literary critics, or those howling dervishes in literature who judge a book according to the popularity or unpopularity of the author’s name, who, hardly glancing at its contents, fasten like lethal bacilli on the weakest points of the body—I have nothing to say. Nor shall I con- descend to notice those crack-brained slanderers—fortunately very few in number—who, hoping to attract public attention by throwing discredit on every writer whose name is better known than their own, foam and bark at their very shadows. These, having first maintained for years that the doctrines taught in the Theosophist, and which culminated in “ Esoteric Buddhism,” had been all invented by the present writer, have finally turned round, and denounced “Isis Unveiled” and the rest as a plagiarism from Eliphas Lévi (!), Paracelsus (! !), and, mirabile dictu, Buddhism and Brahmanism (! ! !) As well charge Renan with having stolen his Vie de Jésus from the Gospels, and Max Müller his “ Sacred Books of the East ” or his “ Chips ” from the philosophies of the the Brahmins and Gautama, the Buddha. But to the public in general and the readers of the “ Secret Doctrine ” I may repeat what I have stated all along, and which I now clothe in the words of Montaigne: Gentlemen, “ I have here made only a nosegay of culled flowers, and have brought nothing of my own but the string that ties them.”

　したがって、過去と未来の私の審査員に対して、まじめな文芸評論家であろうと、著者の名前の人気・不人気によって本を判断し、その内容にはほとんど目を通さず、身体の弱点に致命的な細菌のように付着する文学界の狂人であろうと、何も言うことはないのである。また、幸いにも数は少ないが、自分の名前より有名なすべての著者に信用を落とすことで世間の注目を集めようとし、その影で泡を吹いて吠えるような、狂った中傷者について言及することもないだろう。これらの人々は、セオソフィストに説かれ、『エソテリック・ブッディズム』に集約される教義はすべて著者の創作であると長年主張してきたが、ついに一転して『イシス・アンヴェイルド』やその他の作品はエリファス・レヴィ（！）、パラケルスス（！！）、そして仏教やバラモン教（！！！）からの剽窃だと非難しているのである。 ルナン（訳注：〔1823-92〕フランスの哲学者・言語学者・宗教史家）の ”Vie de Jésus” （『イエスの生涯』）を福音書から盗んだもので、マックス・ミュラーの『東方の聖典』や『チップス』はバラモン教やブッダの哲学から盗んだものと告発しているのと同じである。しかし、一般大衆と『シークレット・ドクトリン』の読者に対しては、私がずっと述べてきたことを、今度はモンテーニュの言葉に置き換えて繰り返すことができる。皆さん、「私はここで、摘んだ花で花束を作っただけで、それを結ぶ紐以外に自分のものは何も持ってきませんでした」。

　Pull the “ string ” to pieces and cut it up in shreds, if you will. As for the nosegay of facts—you will never be able to make away with these. You can only ignore them, and no more.

　こう言うことを許してもらえるなら、その「紐」を引きちぎり、バラバラにするがいい。事実の花束については、決して消し去ることはできない。無視することしかできない。

　We may close with a parting word concerning this Volume I. In an Introduction prefacing a Part dealing chiefly with Cosmogony, certain subjects brought forward might be deemed out of place, but one more consideration added to those already given have led me to touch upon them. Every reader will inevitably judge the statements made from the stand-point of his own knowledge, experience, and consciousness, based on what he has already learnt. This fact the writer is constantly obliged to bear in mind: hence, also the frequent references in this first Book to matters which, properly speaking, belong to a later part of the work, but which could not be passed by in silence, lest the reader should look down on this work as a fairy tale indeed—a fiction of some modern brain.

　この第一巻は、主に宇宙観を扱う部分の前に置かれる序文として、ある種の主題を提示することは場違いかもしれないが、すでに提示した主題にもう一つの考察を加えて、私はそれらに触れることにしたのである。読者は皆、自分の知識、経験、意識の立場から、すでに学んだことに基づいて、この記述を判断するのは必然である。この事実を著者は常に念頭に置かなければならない。それゆえ、この最初の本では、正しくはこの作品の後半部分に属するが、この中に、読者がこの著作を本当におとぎ話、つまり現代の頭脳による作り話だと見下さないように、黙って見過ごすことができない事柄が頻繁に言及されているのである。

　Thus, the Past shall help to realise the Present, and the latter to better appreciate the Past. The errors of the day must be explained and swept away, yet it is more than probable—and in the present case it amounts to certitude—that once more the testimony of long ages and of history will fail to impress anyone but the very intuitional—which is equal to saying the very few. But in this as in all like cases, the *true* and the *faithful* may console themselves by presenting the sceptical modern Sadducee with the mathematical proof and memorial of his obdurate obstinacy and bigotry. There still exists somewhere in the archives of the French Academy, the famous law of probabilities worked out by an algebraical process for the benefit of sceptics by certain mathematicians. It runs thus: If two persons give their evidence to a fact, and thus impart to it each of them 5/6 of certitude; that fact will have then 35/36 of certitude; i.e., its probability will bear to its improbability the ratio of 35 to 1. If three such evidences are joined together the certitude will become 215/216. The agreement of ten persons giving each 1/2 of certitude will produce 1023/1024, etc., etc. The Occultist may remain satisfied, and care for no more.

　こうして、「過去」は「現在」を理解するのに役立ち、「現在」は「過去」をよりよく理解するのに役立つだろう。過去の誤りは説明され一掃されねばならないが、しかし長い年月と歴史の証言は、非常に直感的な人たち（同時にこれはごく少数の人と言える）以外には、もう一度印象づけることはできないだろう。だがこのような場合でも、懐疑的な現代のサドカイ派の人々に、その人たちの頑固な頑迷さと偏屈さを数学的に証明し、記念することによって、真実の人々と忠実な人々は自分たちを慰めることができる。フランス・アカデミーの書庫のどこかに、ある数学者が懐疑論者のために代数的プロセスによって作り上げた有名な確率の法則がまだ残っている。それは次のようなものである。ある事実に対して２人が証拠を与え、それぞれ5/6の確信を与えた場合、その事実は35/36の確からしさを持つことになる、つまりその確率はその不可能性に対して35対1の比率を持つことになる。10人の人間がそれぞれ1/2の確証を与えれば、1023/1024になる、などなど。オカルティストは満足し、それ以上気にすることはないだろう。